



パネルディスカッション記録

2020年1月11日[土] 13:30-16:30

会場：岐阜県立森林文化アカデミー 森の情報センター
主催：岐阜県・岐阜県立森林文化アカデミー



岐阜県では 2019 年度から、林業・木工・木造建築などの仕事に用いる、鍛冶屋が作る道具の供給状況を調査しています。県内には森林や木材に関わる優れた伝統技術がありますが、道具の供給が途絶えてしまうと技術の継承ができなくなるためです。そこで 4 月以降、森林文化アカデミー教員の久津輪雅と学生の大滝絢香が調査を担当し、道具を使う県内の林業家、大工、木工職人、道具を作る県内外の鍛冶職人に聞き取り調査を続けてきました。この調査の途中経過を報告し課題を共有する場と、多くの方に道具に親しんでもらう場を設けたいと考え、2つのイベントを企画しました。

1 つは、刃物の作り手と使い手が語るパネルディスカッションです。パネラーに以下の方たちをお迎えして、じっくり 3 時間、クロストークを行いました。

パネルディスカッション パネラー

江崎 尚史さん（林業家、岐阜県山県市）

川上 舟晴さん（大工、岐阜県高山市）

千代鶴 貞秀さん（鉋鍛冶、兵庫県三木市）

水野 清介さん（鉋鍛冶、新潟県長岡市）

西山 賢さん（山林用刃物商、高知県香美市）

進藤 恭平さん（鍛冶屋創生塾助手、高知県香美市）

もう 1 つは、曲線や曲面を削る「^{なんきんがんな}南京鉋」という道具にスポットライトを当て、道具の作り手と使い手から話を聞き、南京鉋で木を削ったり、南京鉋を作ったりして楽しむというイベント「ナンキンフェス」です。以下の方たちに講師を務めていただきました。

南京フェス 講演・実演

大久保 公太郎さん（木工家、長野県松本市）

吉野 崇裕さん（木工家、山梨県富士河口湖町）

杉田 悠羽さん（道具製作者、岐阜県富加町）

西 禎恒さん（道具製作者、兵庫県多可町）

この冊子は、1 つめのパネルディスカッションの内容を記録して構成したものです。この場で語られ、共有されたことが、より多くの道具の作り手・使い手の方々に届き、参考になればと願っています。

01	はじめに
04	チラシ両面
06	1. 調査概要
08	2. 林業の道具を使う ～岐阜県の林業家
14	3. 林業の道具を作る ～高知県・土佐打刃物
22	4. これからの林業に手道具は？
25	5. 木工・大工の道具を使う ～岐阜県の大工
32	6. 木工・大工の道具を作る ～新潟県・越後与板打刃物
36	7. 木工・大工の道具を作る ～兵庫県・播州三木打刃物
42	8. これからの木工・大工に手道具は？

岐阜でつなく、 道具の作り手と使い手の輪

岐阜は木の国、山の国。

そまびと おの き ちょうな おが ひ
杣人たちは斧で木を伐り、手斧ではつり、大鋸で挽き、
柱や板を作ります。大工たちはそれを鑿^{のみ}で掘り、鉋^{かん}で
削り、建物や家具を仕上げます。

人が木という素材を使う時、なくてはならない鉄の道具。
それは鍛冶屋が作る道具です。

今でこそ林業も建築業も機械化が進み、手道具に頼る
場面は減りました。

しかし刃物が木の繊維を切る最も基本の原理を学ぶ時、
そして機械ではなし得ない究極の仕上げを木に施す時、
職人たちは今も鍛冶屋が作った鉄の道具を手にします。
新潟・与板、兵庫・三木、高知・土佐山田など、産地の
熟練たちが作る道具です。

この文化を受け継ぐために、道具の作り手と使い手が
集い、語り合い、楽しむ3日間の祭典を企画しました。
ぜひご参加ください。

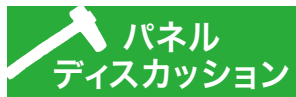


鍛冶フェス

ものづくりを支える
鉄の道具

the Blacksmithing
Festival

vol.1



パネル
ディスカッション

2019年度に実施した林業や木工の職人が使う道具の調査報告とクロストーク

刃物の作り手と使い手が語る

2020年1月11日[土] 13:30-16:30 参加無料・要申込
定員 100人



ナンキンフェス

なんきんがんな
曲線や曲面を削る南京鉋について作り手と使い手から話を聞き、体験します

南京鉋の祭典 - 手道具に親しむ -

2020年1月12日[日]・13日[月・祝] 有料・要申込
定員計 50人
10:00-17:00 9:00-15:00

会場：岐阜県立森林文化アカデミー 森の情報センター
主催：岐阜県・岐阜県立森林文化アカデミー
協力：グリーンウッドワーク研究所



岐阜県では 2019 年度から、林業・木工・木造建築などの仕事に用いる、鍛冶屋が作る道具の供給状況を調査しています。県内には森林や木材に関わる優れた伝統技術がありますが、道具の供給が途絶えてしまうと技術の継承ができなくなるためです。4 月以降、森林文化アカデミーの教員と学生が調査を担当し、道具を使う県内の林業家、大工、木工職人、道具を作る県内外の鍛冶職人に聞き取り調査を続けてきました。この調査の途中経過を報告し課題を共有する場と、多くの方に道具に親しんでもらう場を設けたいと考え、2つのイベントを企画しました。

1 パネルディスカッション | 刃物の作り手と使い手が語る

参加無料
定員 100 人
要申込

2020年1月11日[土]13:30-16:30 開場 13:00

2019 年度に実施した林業や木工の職人が使う道具の調査報告と、林業家や大工、鍛冶職人が語ります。

報告者：久津輪 雅（岐阜県立森林文化アカデミー 准教授）

パネラー



江崎 尚史

林業家、岐阜県山県市



川上 舟晴

大工、岐阜県高山市



千代鶴 貞秀

鉋鍛冶、兵庫県三木市



西山 賢

山林用刃物商、高知県香美市



進藤 恭平

鍛冶屋創生塾助手、高知県香美市

2 ナンキンフェス | 南京鉋の祭典 - 手道具に親しむ -

有料
定員計 50 人
要申込

2020年1月12日[日]10:00-17:00・13日[月・祝]9:00-15:00

参加費：A 5,000 円（1/12 の聴講+削り体験のみ）：定員 30 人

B 45,000 円（1/12 の聴講+削り体験+南京鉋づくり講座）：定員 20 人※大久保コース、西コース各 10 人。

曲線や曲面を削る南京鉋について作り手と使い手から話を聞き、体験します。B をお申込の方は南京鉋の台を打ち、1 本製作できます。

スケジュール 【1/12】

- 9:30 開場
- 10:00 開演、トーク
- 12:00 昼食
- 13:00 鉋刃製作デモンストレーション
- 13:30 南京鉋削り体験
- 15:45~17:00 (B 申込者のみ) 南京鉋づくり講座

【1/13】 (B 申込者のみ)

- 9:00 制作開始
- 12:00 昼食
- 13:00 再開
- 15:00 終了予定

講演・実演



大久保 公太郎

木工家、長野県松本市



吉野 崇裕

木工家、山梨県河口湖町



杉田 悠羽

道具製作者、岐阜県富加町



西 禎恒

道具製作者、兵庫県多可町

会場：岐阜県立森林文化アカデミー 森の情報センター 501-3714 岐阜県美濃市曾代 88、0575-35-2525(代)

主催：岐阜県・岐阜県立森林文化アカデミー 協力：グリーンウッドワーク研究所

問合せ：久津輪 雅 mkutsuwa@forest.ac.jp

詳細・申込は ▶▶ <https://www.forest.ac.jp/events/2020kajifest/>



鍛冶フェス

ものづくりを支える 鉄の道具



パネルディスカッション

日時 2020年1月11日(土) 13:30～16:30

会場 岐阜県立森林文化アカデミー・森の情報センター

主催 岐阜県・岐阜県立森林文化アカデミー

司会・報告 久津輪 雅(岐阜県立森林文化アカデミー准教授)

パネラー 江崎 尚史(林業家、岐阜県山県市)

川上 舟晴(大工、岐阜県高山市)

千代鶴 貞秀(鉋鍛冶、兵庫県三木市)

水野 清介(鉋鍛冶、新潟県長岡市)

西山 賢(山林用刃物商、高知県香美市)

進藤 恭平(鍛冶屋創生塾助手、高知県香美市) ※発言者の敬称は省略

久津輪 私、この岐阜県立森林文化アカデミーの木工の教員の久津輪と申します。よろしくお願い致します。さっそく本編を始めさせていただきます。そもそも、このイベントをなぜやることになったかという経緯からお話ししようと思います。

Panel パネルディスカッション



1. 調査概要

久津輪 岐阜県内のある職人さんから言われたことがきっかけでした。岐阜県内には職人さんがたくさんいるわけですが、その職人さんたちが使う道具を作る人たちが少なくなっていて、道具が供給されなくなりつつある。そうすると、岐阜の大切な伝統技術、伝統工芸も続かなくなる。それで、それをちゃんと一度調査した方が良くないかないか、というお話があって、岐阜県としてこの調査を始めることになったんですね。実際の調査を、私と森林文化アカデミーの学生とで、今年度(2019年度)の4月からスタートすることになりました。





私、元々は木工の教員なので、職人といってもありとあらゆる業界があるんですけど、やはり森とか木に関わる分野に最初の年はまず絞らないとなかなか調査もしにくいということで、森と木に関わる分野の職人さんの道具に絞って調査を始めることにしたんです。

まずは岐阜県内を中心に、道具を使う人 33 人の方にお話を聞いてきました。林業家の方、それから大工さん、建具職人さん、あるいは木工家の方達、そういった方達にお話を聞いてきました。

それから今度は道具を作る側の方達ですけれども、作る側は、六大刃物産地という呼び方をすることがあるんですけれども、七大と言うこともあります、この六大刃物産地と呼ばれる、岐阜県関市、それから福井県は越前ですね、新潟は長岡市与板と三条、兵庫県の三木、大阪府の堺、高知県の香美市や南国市、そういった所が主だった刃物産地になるんですけれども、この中でも森と木に関わる道具ということになると、新潟県の与板、三条、それから兵庫県の三木、これが木工・大工の道具です。それから、高知県の土佐の刃物が林業では有名ということで、それらの産地を実際に訪問して 28 人の方にお話を伺いました。

さらに“つなぐ”人ということで、それらの道具を扱ってらっしゃる問屋さん、小売店さん、職人さんたちを束ねる組合の方とか、そういった方 16 人にもお話を聞いてきました。

この調査は本当に今年度 4 月から始めたばかりで、1 年目でこんな大きな報告会をやるつもりは実はなかったんです。2 年ぐらいじっくり調査して、報告会をできるとしたら 2 年目の終わりか 3 年目ぐらいかなと思っていたんですけど、たまたま今年度、あとでご紹介しますけど、岐阜県のご出身の方が有名な鉋鍛冶の三代目を襲名された、あるいは有名な刃物産地で鍛冶屋さんの後継者を育成する学校ができたとか、あと、なんとクラウドファンディングでこれからお金を集めてお弟子さんを育てていこう、という動きがこの 1 年の間にたまたま同時に起きました。そこで、まだ調査自体は中途半端ですが、その方達に集まっていたいて、それぞれお話を共有して次に繋がられないかなと思って企画したものです。ですので、調査自体は本当にまだまだ荒削りな状態で、私自身も鍛冶屋さんの仕事についてまだほとんど知らないに等しいんですけど、今日のパネラーの方達に詳しくお話いただこうと思っています。

2. 林業の道具を使う ～岐阜県の林業家

久津輪 まず、前半は林業の、山仕事の道具についてのお話をしていこうと思ひまして、まずはお一人目のパネラーをご紹介します。江崎尚史さんです。

久津輪 江崎さんはお祖父さんの代から。

江 崎 お祖父さんの上ですね。僕で四代目です。

久津輪 四代目なんですね。

江 崎 今、108年。

久津輪 岐阜県の山県市ですね。林業の関係は、森林文化アカデミーに学科もあるので、林業専門の教員がたくさんいるんですけども、その林業の教員たちに「林業の手道具の事を聞いたら誰が一番良いですか？」と聞いて、一番先に名前が挙がるのが江崎さん。林業関係のプロ向けの各種講師も務めていらっしゃるし、うちの学生にも非常勤講師として教えていただいています。まずは、ちょっとその動画をご覧くださいこうと思います。

(江崎氏動画再生)

久津輪 これ、12月ですね。森林文化アカデミーのエンジニア科、高校卒業で入って来る学生たちの1年生、伐木造材実習という授業の初めの方ですね。

(動画内)

江 崎 (鉋を見せながら) いいですか、この中指と薬指さんだけが仕事をするんですよ。あとは握力。ぐっ、ぐっ
と握るだけ。この木に対して、85度。ほんのちょっとやな。平行よりほんのちょっと上げる。で、手元を45度下げ。こうに下げて、(鉋を振る)、ぽんと送り出すだけ。
(手ノコを使った伐採) で、大鋸^{おが}っていうんだけど、でっかい鋸から僕は始めましたんで、必ずこういう風に添えるんです。添える。で、直径の4分の1で止める。ここで受け口を作ります。良い? こういう風に手ノコ
だったら絶対1mm以内で切っていきますんで、粗相がないです。チェーンソーだと当てたら切れちゃうんで。ゆっくり倒れます。はい、退避。
合わせ切り、ここ。っていう風ね。これ、ピシッと合わせ切りでできればO.K。
これは鉋です。これは親父が死ぬ前に買ってくれたんで、はい、それで23年。

久津輪 ずいぶん狭くなりましたね。

江 崎 狭くなりました、はい。柄は、これ三代目です。3回替えました。

(久津輪解説 研いで形が変わっちゃってるって事です)



左側が久津輪、右側が江崎さん



森林文化アカデミーの江崎さんの実習動画



<https://youtu.be/y9yQlwqYWIE>



江崎さんによる手ノコを使った伐採の実演風景

ね。)

動画字幕 なぜ3回替えたんですか？

江 崎 バランスが違ってくるんで。(刃の)太さによって柄のバランスがあるんで。最初はでかいので、だんだん、だんだん細いになっていって、です。

動画字幕 自分で削るんですか？

江 崎 自分で。これ自分で切ったカシの木です。板取産。板取で切ったカシの木です。8年干して。

動画字幕 ノコギリもみせてください。

江 崎 ノコギリは普通の。西山商会さんのやつ。これ、24cmです。普通の安い方です。で、だいぶ細くなった。(字幕：7年使っています。) ちょっとこの前、アサリが、あんまり切れなかったもんで、出し過ぎました。

(**久津輪解説** これ細くなったというのは研いで目立てしてるからって事です。)

動画字幕 自分で目立てできるほうがいいですか？

江 崎 僕はこれで一番最初に習ったんで。鋸が最初で習ったんで、チェーンソーで習っていないんで、これができないかんという事でやってます。

動画字幕 さやの替え時はいつですか？

江 崎 中がカタカタ、カタカタ鳴ってきたら、「ああ、もう小さくしようか」って。これ、現物合わせなんで。これで今、三代目になります。鉋の柄と一緒に三代目で。だんだん小さくなって、落とさんように、落とさんように。意外に落ちないんで、これ、現物合わせだと。皆のだと作り付けの仕立てもんなもんで、結構落とすんですよ。ましてや、これ皆一丁差しなんで、カタカタカタカタやっていると落ちる。

(**動画終了**)

久津輪 という事で、うちの学校の林業の実習ではこういう教育を江崎さんにやってもらっているんですけど、江崎さん自身は林業の現場に入られたのはいつ頃からはなるんですか。

江 崎 親父が死ぬって事ですぐに帰ってきたんですけど、24歳ですね。で、林業やりたいって思ったのは、もう小学校ですね。

久津輪 小学校？

江 崎 小学校。

久津輪 じゃあ、もうその頃からお父さんについて、山に入って。

江 崎 そうですね。土日とか休みがあれば、山に行って材木出ししました。

久津輪 手道具についてはどういう教育を受けてました？

江 崎 うちに12人の職人さんっていうかね、作業

班がいましたんで、その人達の道具を見ながら、本当に覚えてただけです。

久津輪 そうですか、見ながら。こう、誰かが詳しく教えてくれたりとか。

江 崎 一切ないです。

久津輪 そうですか、見て覚える。

江 崎 はい、見て覚えます。

久津輪 お父さんも、具体的に教えたわけでもなく。

江 崎 一切ないです。

久津輪 そうですか。

江 崎 もう叩かれて。

久津輪 叩かれて。

江 崎 叩かれて覚えられたんです。

久津輪 で、手道具を覚えて林業現場でやってらっしゃって、ただ林業のあり方自体がすごく変わってきたという風に伺ったんですけれども、いつ頃からどういう風に変わってきたんですかね？

江 崎 そうですね。もう10年ちょいですね、10年ちょい前から本当に県のやり方が高性能林業機械をどんどん進めなさいという制度に変わってきたもんで。もう原始的なもんは捨てる、排除になりかけてきたもんで。そっからですね、どんどんどんどん変わってきたのは。

久津輪 10年ぐらい前から。

江 崎 そうですね。

久津輪 それまでは結構やっぱりまだ出番もあったという。

江 崎 ありました。

久津輪 そう、だから今回調査で一番最初に江崎さんところに伺った時に最初に言われたのが、「いや、もう現代の林業現場で手道具なんて使ってませんよ」って言われて、そうなのか…と思って。この先、調査の先がちょっと見えないような感じがあったんですけど。でも、12月に授業の現場に伺ってみると、あれだけ詳しく細かく手道具の使い方を教えてらっしゃって。それがすごく印象深かったんですけど、なぜ現代の現場ではもう使わなくなってしまったのに、あれだけ細かく教えてるんですか？

江 崎 やっぱ、卒業した生徒が恥ずかしくないように。絶対基本からと思って、一から教えてます。

久津輪 でも教えたとしても現場では使わないわけじゃないですか。

江 崎 そうですね。

久津輪 例えば、鉋とか鋸の使い方っていう事が、今後やっぱり役立つ場面っていうのはありますか？

江 崎 絶対あると思います。林業だけじゃなしに、

いま木工でも建築部門でも絶対何かに役立つと思うんで。それで基本で、って事で教えます。

久津輪 具体的には林業の現場だとどういう場面でその教えが生きるという感じですか？

江 崎 特に林業はチェーンソーが挟まれる、詰められるっていうんですけど、材木に挟まれるって時に必ず手鋸を持っていないと、人を呼んでくると大変な事になりますので。やっぱりそれで手鋸と鉋が無ければダメっていう事になりますし、測量でもこの2種類が無いと測量できないって事で、ですね。

久津輪 あと、いま江崎さんの動画で見せていただいた中で、やっぱりこう自分の手に合わせてとか、こう動きに合わせて柄も作る。あと、バランスも考える。鞘も作る。これ、江崎林業の従業員さん達は皆さん、そうやってやってらっしゃったんですか？

江 崎 そう、全員ばらばらです。全員作ってます。

久津輪 ああ、そうですね。

江 崎 はい。全員が全員、もうばらばらで作って置いて。1人1個ずつで、皆カスタマイズですね。

久津輪 やっぱりそれは、重要ですか？

江 崎 重要だと思います。やっぱり今の既製品でもそうなんですけど、既製品買って、自分に合わせるっていうのがなかなか、いまできないんで。で、怪我の元になりますので、自分の手に合わせるという事でね。

久津輪 そうですね。実は、森林文化アカデミーでもこういう江崎さんの教えてらっしゃる内容と重なるところもあるんですけど、昨年度までは既製品の鉋を買ってもらっていたのを、今年度に入った林業の学科の学生達からは、とりあえず学校にある既製品を1〜2ヶ月使ってもらって、自分の手の感覚がどんな感じかを掴んでもらって、刃だけ買って柄は自分で削って仕込むっていう授業を、今年から本当にやり始めたところなんです。だから、そうやって自分で道具を作れるんだよ、っていうことを感覚的に知って

いうのも、大事かもしれないですね。

江 崎 そうですね。とにかく何でも作れないとダメって事です。やってかないと生きてけないよ、という事で、良い経験だと思います。

久津輪 生きてけないよというのは林業の場合、本当に命に関わる場面もあるからって事です。

江 崎 ほとんどそうですね。じゃないと本当にやばいんで。いつ死ぬか分からないんでね。

久津輪 実際に身体に合わない手道具を使っていた事で、そういう身の危険にも繋がるみたいな事ってありますか？

江 崎 そうですね、使い方とか研ぎ方もそうですし、自分の合わないもの使っとしてもそうなんですけど、やっぱり自分の怪我に繋がってくるというのはよく分かるんで。自分もやっぱりいきなり初めてこのヨキを使って枝打ったんですけど、枝打って、もじり斧っていつて反対に斧を使ってね、パーンって打ったら、このふくらはぎが半分に割れましたんで。そっから始めましたんで。あ、これ違うんだって事でね。で、親父はそんな時は何も言わずに「ん」ってだけだったんですけど。僕、(傷口を)パカパカしながら仕事はしてましたけど。あ、こういうもんだという事で。やっぱり怪我は付きもんって事ですけど、やっぱり良い研ぎ方をしてると治りが早いって良く分かります。

久津輪 身をもって感じます？

江 崎 はい、感じました。

久津輪 今日、江崎さん、たくさん道具を持ってきたんですけど、この中でもやっぱり現代の林業現場でも一番優先度が高い、使われなくなったとはいえ、やっぱり欠かせない道具っていうのはまず何ですか？

江 崎 まず、鉋、ノコですね。

久津輪 鉋、ノコ。

江 崎 はい。いま、前に写したんですけどこれですね。僕、いまこれ使ってますけど、鞘も柄も三代目として使っております。で、鞘はですね、あんまり大きな声では言えないですけど、金華山のロープウェイの下に枯れたヒノキ、国有林の枯れたヒノキを大体、僕1年に1回伐採しに行くんですよ、危ないっていう事で。崖の所に行くんですけど、そこでちょっと頂戴して。これだけ一個いただいとくと、いう事になります。

久津輪 いま、録画してますけど。

江 崎 (笑) はい。だいたいこの幅で100年経ってますので。ものすごく良いですね。

久津輪 目が詰まってて、安定しているという。



江崎さんの鉋や手斧など

江 崎 安定してますね。削りやすいし。

久津輪 まず、鉋、ノコ。

江 崎 はい。

久津輪 その次はいかがでしょう？

江 崎 その次は斧ですね。仕事に入る前、斧入れ式を自分なりにやります。神様に挨拶をしますので、必ずこれを使います。これと鉋をセットで、神様に挨拶をします。

久津輪 それは儀式として。

江 崎 儀式ですね。

久津輪 という事ですね。

江 崎 必ずですね。という事と、やっぱり皮を剥ぐという事ですね。木の皮を剥ぐという事に、これ使いますので。

久津輪 木の皮を剥ぐっていうのは、その後チェーンソーで伐倒するための前段階として？

江 崎 そうです、前段階ですね。

久津輪 斧っていうと普通一般の人がイメージするのはこう、倒すそのものの作業に使うっていうイメージがあるんですけど。

江 崎 そうですね。クサビを打つっていうのもありますけれども、僕はまず優先的に皮を剥ぐと。

久津輪 皮を剥ぐっていうのが今の斧の主な役割って事ですね。

江 崎 はい。

久津輪 それからいかがでしょう？

江 崎 あとカンブチですね。これ、斧の小さい版ですね。こういうカンブチと言われるもの。これも皮を剥ぐという事で、あと手斧のになりますので、これもクサビを打つっていうのも一番使います。

久津輪 そう、この手斧系は最近はやっぱ刃物というよりもクサビを打つのに使うというお話を伺ったんで、それだったら玄能というか、金槌を持っていけば良いんじゃないかと思ったりもしたんですけど、やっぱり斧、手斧の方が良いですか？

江 崎 そうですね、玄能だと1個しかないんですね、使える用途が。これ（斧）だと叩けてめくれるという2個あるんで。1個で2個の仕事ができるというところが結構魅力かなと。あと軽い。

久津輪 なるほど。その次はいかがですか？

江 崎 あとはもうトビとかですね。ツルとかトビ類があって、あとこの鎌が一番多いかなと思っています。

久津輪 トビはどういう時に使う？

江 崎 木を転がすっていう、木をずらすとかごろっと転がしたりする時にこのトビを使います。

久津輪 これですね、トビ。ツルっていうのは？

江 崎 これがトビって言われるものになります。これ、うちの二代目のお祖父さんが使ったやつを、宮松っていうんですけど、ここに宮松って入ったんですけど、これを打ち直して僕用に使ってます。あとツル。ツルはこっちの方ですね。こっちは大きい材木を転がす時に使います。ごろんと、本当にこう1mくらいの材木でもこれでごろっとしますので、こういう風に使います。大きい仕事をする時にはツルになります。小さい仕事をするっていう時にはこの普通のトビになります。あとはこのガンタって呼ばれる、木回しと言って、かかり木と言って隣の木にかかった時にね、木を回すっていう、この作業に使います。これ今結構使ってますので。

久津輪 今でもやっぱり。

江 崎 今でも僕は使ってます。まあ、新しくフェリングレバーっていう名前で舶来もんとかがいっぱい出ていますが、鉄製でなんかちょっとやぐい（脆い）様な感じがしますので。やっぱり自分で使ったやつじゃないとって事で。

久津輪 やっぱり自分の手にフィットする木の柄の道具の方が…。

江 崎 やっぱり良いかなと。あとはもう自分が、僕が使ったこのガンドウですね、鋸になります。これ、一番最初に親父が伐採する前、チェーンソー前にこれでやれという事でこれを使っていました。

久津輪 ちょっと見せていただいても。

江 崎 これで、大径木はこっち、小径木、中径木はこっちっていう事になります。これ、横挽きになりますけどもう1個家に縦挽きもありますので、山で板が挽ける様にならんといかんよって事で両方あります。



江崎さんの大鋸



持ってきていただいた江崎さんの林業道具、トビヤツルなど

久津輪 さすがにこういう大きい鋸は、最近の出番が少なくなってきたというお話でしたが。

江 崎 そうですね。もう出番は無いですね。出番はあっても、台風とか雪害木とかでどうしてもチェーンソーが届かないという時に、この手鋸を竹とかに繋いで、こう遠くからギコギコやって切るといふ風に、自分の命が危ないっていう場面でしか使わないです。

久津輪 ああ、そうですか。これらの道具に関しては江崎さんの他にもう1人、うちの林業の教員から薦められた郡上の小川にいらっしゃる林業家の日下部修さんにもお話を聞いてきたんですけど、日下部さんもやっぱりこのトビヤツルについては相当…。

江 崎 こだわってます。

久津輪 こだわってらっしゃいますよね。

江 崎 はい、マニアックです。

久津輪 どこにこだわりがあるんですかね？ その形とか。

江 崎 形、やっぱりなんですか、自分に合って、なんて言うんですかね、自分に使いやすいという。それが自分で一番なんかちょこちょこやってみたいというのがあるんでしょうね。

久津輪 それはやっぱり丸太のサイズの話ですか？

江 崎 サイズもあります。サイズもあるし、使う場面もあるんで。

久津輪 それは、転がす…。

江 崎 転がす、引っ張るですね。上げるとか、「はる」って言うんですけど。

久津輪 その日下部さんという方は、もう江崎さんよりも大分年上。

江 崎 そうですね、もう70歳以上…。

久津輪 ですが、ご自身で鍛冶屋仕事もされるんですよ。だから、自分に合ったトビとかツルをカスタマ

イズで自分で打って作ることをされている。で、やっぱり日下部さんが仰っていたのは、最近若い林業家の方はいきなり森林組合とかに入って現場に行っちゃうので、手道具を学ぶ機会があまり無いんだけど、本当はこういうトビツルの使い方知っとったら現場ですごい役立つんだけどなあ、というお話をされていました。

江 崎 僕もそう思います。

久津輪 そうですか。

江 崎 はい。

久津輪 うちの様なこういう学校で勉強してから出れば、江崎さんから習う事もできますけど、そうじゃ無い人も今結構多いですよ。

江 崎 だと思います。

久津輪 江崎さんご自身も鍛冶屋さんとの付き合いというのは今までありました？

江 崎 はい。ずっと、鍛冶屋さんのおじいさんに付き合ってもらってたんですけど、亡くなってからは、どこも。どうしようという事になりました。

久津輪 それはどちらの鍛冶屋さん？

江 崎 洞戸ですね。洞戸の鍛冶屋さんで。

久津輪 かじ孫さんですね。

江 崎 かじ孫さんに随分お世話になりましたけれども。亡くなってからは、もうどうしようっていう。探してます。

久津輪 関の洞戸にかじ孫っていう屋号で、80歳ぐらいでしたかね、おじいちゃんが、野鍛冶さんですよ。農機具、林業の道具全般を作っている方がいらっしゃったんですけど。実は私も竹細工の関係の道具を作ってもらった事があったんですけど。現物を持っていけば何でも作ってくださいましたよね。

江 崎 何でも作ってくれます。

久津輪 江崎さんの場合はどんなものを作ってもらったんですか？

江 崎 トビの先をカスタマイズしてくださいって言って、切って、先をちょっと違う風につけてくださいとか。僕は自分で畑も自分の所、食べるだけは作ってますので、鋤の先をつけてくださいとか、全然関係ない所までやっていただいて。

久津輪 農機具の鋼のつけ直しもしてもらって。

江 崎 そうですね。あと、お値打ちに。

久津輪 お値打ちに。今、鍛冶さんが近くになくなってから困る事もありますか？

江 崎 あります。昨日ですね、僕、岐阜市の所で出た直径1mのケヤキを切ってきたんですけど、こういう昇柱器ですね、木に登るやつですね、これを作って。これは違う鍛冶屋さんに作っていただいたんです

けど、これを作っていただく鍛冶屋さんもなかなかなくて。本当にものすごく悩んでいます。

久津輪 例えばそれは既製品で、そういう林業関係の道具で、手に入ったりはしないものなんですか？

江崎 なかなかしないです。あと、個人個人全員違いますので。登る人、この形も違うし、足の大きさも違うんで。それに合わせて作るんで、なかなか難しいと思います。既製品には無いですね。

久津輪 なるほど。じゃあ、高性能林業機械なども入っていける人工林で均質的な林業だったらそういう道具は要らないけれど、特殊伐採と言われる極めて大きな木とか、街中に生えている木なんかを切ろうとする時には、やっぱりカスタマイズされる道具が要って。

江崎 絶対要りますね。

久津輪 そのためには鍛冶さんが、できれば近くに。

江崎 近くにあった方がありがたいです。

久津輪 でも、この近くでは各務原にあと1人野鍛冶さんいらっしゃるんですけど、もうその方も60代後半ぐらいです。これからどうでしょうね。

江崎 もう自分でやるしかないですね。

久津輪 自分でやるしかない。

江崎 自分でちょっとやってみるしかないですね。今、うちでこういうトビの先は自分で、一斗缶で焚いて、自分でふーって吹きながらやって、カンカンカンやってますけど。

久津輪 あ、そうですか。

江崎 まあ、上手くは付かないです。

久津輪 ちょうどこのイベントが始まる直前に、打ち合わせの前にちょっと時間があつたんですけど、後から出ていただく高知県の刃物メーカーの方と江崎さんとで立ち話が始まって、早速、「これ何とか作れないか」みたいな話が出てましたよね。これですね、この道具です。何に使うか分かります？ これ何に使うんでしょうか？

江崎 これ、ワイヤー針と言って、ワイヤーを編む仕事の時に使うやつなんですけど、これがものすごく僕達にとっては大事になりますので、この形ですね。これ1本作るのに、僕2年かかりましたけど、形、焼きを入れて焼き戻して叩いて削ってっていう風で2年かかったんですけど、これ今、本当に一番しっくりきますので。これをできたら作っていただけるとありがたいかなと思って相談させていただきました。

久津輪 それは、ワイヤーって事は架線集材で使う？

江崎 架線も使いますが、昨日の様なクレーン作業ですね。クレーン作業は、僕、必ず自分が編んだもののしか使わないんで。他人の編んだものは一切使わな



道具を手にもつ江崎さん

いんで、信用なりませんので。買った物も信用ならないので、自分で全てやります。

久津輪 機械を使った林業をするようになって、そのワイヤーを編む作業っていうのは必要な場面が結構あるって事ですか？

江崎 あります。あると思います。

久津輪 じゃあ、林業やってらっしゃる方は結構この道具は使う。

江崎 使う可能性はあると思います。ただ、使えるかどうかは分からない。

久津輪 使えるかどうかは教育次第って事ですね。で、その使う上でやっぱり適した形…。

江崎 そうですね、適した形ですね。

久津輪 というのがあるって事ですね。で、そういうお話を先ほど立ち話の中でしてらっしゃって、道具を作る人と使う人が近くにいるというのはやっぱり良いなあって見ながら思っていましたけど。

江崎 そうですね。



2年かけて作ったワイヤーを編むときに使う針

3. 林業の道具を作る ～高知県・土佐打刃物

久津輪 はい、ありがとうございました。では江崎さんにはこのまま残っていただいて、その高知県からお二人のゲストにお越しいただいているので、ご紹介したいと思います。それぞれ自己紹介をお願い致します。

西山 座ったままですみません。高知県から来ました有限会社西山商会の専務取締役を務めております西山賢と申します。皆さん、よろしくお願い致します。

進藤 同じく高知県から来ました、鍛冶屋創生塾という後継者育成の学校、鍛冶屋の学校の助手をしています、進藤と申します。よろしくお願いします。

久津輪 西山商会さんはうちの学校でも度々お世話になっている土佐の山林用の刃物のメーカーであり商社って事ですね。で、社長の息子さんと、営業で回っていらっしゃる。



左から久津輪、西山さん、進藤さん、江崎さん

西山 はい。我社は全国各地の林業事業体様を対象に土佐打刃物を中心に営業販売している会社で、私は九州地区を担当しております。

久津輪 進藤さんは、後でご説明するんですけど、鍛冶屋さんの学校がもう本当について最近、11月にスタートして、その学校で現場で後継者の指導にあたっているらしい。

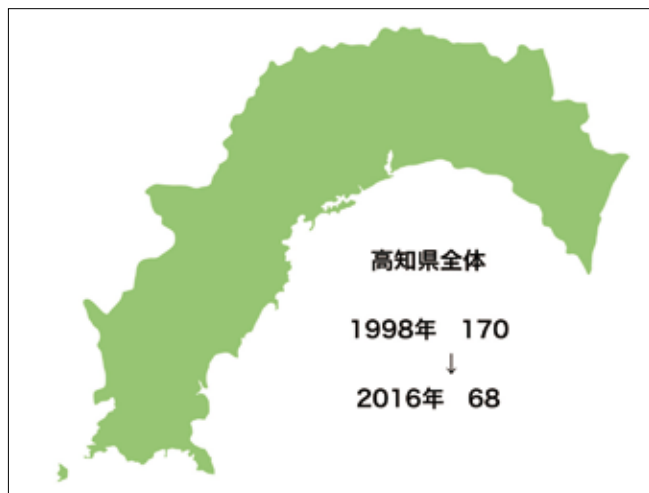
進藤 助手ですね。

久津輪 この土佐の打刃物の事は私も行った事がなかったんですけども、今回の調査で初めて行かせていただいて、3日間の駆け足の調査でしたが、お話を伺って来ました。まずは、どういう鍛冶屋さん達に会って来たかというのをご覧にいれようかと思いますので、スライドでご紹介します。

高知県全体で今から20年ちょっと前には、何と170軒もの鍛冶屋さんがいらっしやったと、本当に一大刃物産地だったんですけども、2016年にはそれが68軒にまで減ってしまった。元々、戦国時代ぐらいから刃物産地としての歴史が始まったみたいですね。

西山 そうですね。文献に残っているのは長曾我部元親、皆さんご存知かと思うんですけど、四国を制圧していた戦国大名。その時代に長宗我部地検帳というのを作成しました。その当時は399軒の鍛冶屋がいるとその文献に残っているので、それぐらい歴史が古い。鍛冶屋さんがたくさんいたエリアではあります。

久津輪 私も資料を読ませていただいたら本格的に発展してきたのはやっぱり明治になってから後で、特に明治20年ぐらいに西洋から非常に使いやすい鋼材が入ってきたという事と、あと北海道開拓が行われて、北海道の原野を切り開くのに大量の道具が必要になっ





上村芳雄さん（75） 健太郎さん（46） ナタ 鉈・柄鎌



松本志津夫さん（86） 孝さん（59） ナタ 鉈



世ノ本 豊年さん（77） 貢さん（40） ナタ 鉈・柄鎌 エダウチノ 薪割斧・枝打斧



浜田芳彦さん（84） ナタ 鉈・柄鎌 エダウチノ 薪割斧・枝打斧

て、それで高知県からわざわざ鍛冶屋さんが直接営業に行かれた歴史もあるという事ですよね。

西山 そうですね。北海道は一大産地になりました、明治維新の頃からですけど、開拓の歴史から見ると山ばかりだったんで、そこを開拓するには切れる刃物の需要がすごく高まっていたので、高知の鍛冶屋さんは山の道具を作るのに特化して発展していったんだと思います。あと山師の人達も、江戸の頃からだと思んですけど、戦国時代が終わって平和な世の中になって、産業というものが分野に分かれて色々生まれていくんですけど、山師の技術がすごく高く、全国各地へ出稼ぎに行つてそこで住んでリーダーになる人が多かったと聞きます。その土佐の山師たちが使っている道具を見たら土佐打刃物を使つて、それがよく切れるし刃も付けやすいと口コミで広がっていったところもあります。

久津輪 そういう歴史があるんですけど、場所的に言うと香美市、前は土佐山田町って言ってたんですかね。

西山 香美郡土佐山田町が平成18年に隣の香北町・物部村と合併して香美市になりました。

久津輪 という事ですね。香美市が一番大きくて、32～33人の方がいらっしゃる。その次は南国市、隣接しているところですね。そこが10～15人ぐらい。その次が須崎市で、6～7人。その他に野鍛冶的にばらばらと分散していらっしゃるというのが、鍛冶屋さんの状況ってところですね。

で、2泊3日の行程で7軒の鍛冶屋さんを訪問してきました。作っているものとしては、鎌と鉈と鉋と斧と包丁という大体そういうものなんですけど、その内今回は森と木に関わるものという事で包丁鍛冶の方は外して、主に斧、鉈、鎌、を見学してきました。ちょっと写真でご覧にいます。

まずは上村芳雄さん、健太郎さん。親子でやってらっしゃいますね。1年間に3600本ぐらい作るという。だから1日辺り10本ずつみたいなペースで作られているって事です。でも、鉈以外にも作られていますよね。

西山 はい、上村芳雄さんはとても器用なので腰鉈・ヒツ鉈・柄鎌・牛の爪切りまで多種類を製作します。

久津輪 それから、松本志津夫さんと孝さん。こちらも親子で鉈の鍛冶屋さんです。で、世ノ本豊年さんと貢さん。こちらも親子で。奥が豊年さんで、手前が貢さんで斧鍛冶さん。香美市には斧の鍛冶屋さんが2軒しかなかったんですけど、もう一方が浜田芳彦さん。この方が実は今、伊勢神宮の式年遷宮用の木の伐採の儀式である御杣始祭で使う三ツ緒切りの斧や、

あと長野県の諏訪大社の御柱祭に使う斧もお作りになっている。

それから今までご紹介したのは厚物系、刃が分厚いものを作られる鍛冶屋さんで、ここからは薄物系ですね。鎌を主に作っていらっしゃる山崎龍太郎さん、それから山崎洋介さん。どちらも鎌です。

そして、原耕一さんと邦博さん。原福さんですかね。

進 藤 原福鋸工業所ですね。

久津輪 さっき江崎さんが動画の中で、西山商会さんで買ったやつって仰ってたんですけど、ひょっとしたらここで。

西 山 そうですね。原さんをお願いしています。

久津輪 江崎さん、この方が作ったものですよ。

江 崎 (笑)

久津輪 で、ここまで見ていただいて分かると思うんですけど、親子か60代以上の方が一人でやっている所がほぼ全てと言って良い感じですね。

西 山 そうですね。

久津輪 まずその事にびっくりしたんです。40代ぐらいでまだ現役バリバリでこれからという息子さん達が、結構後を継いでいる事にすごいなと思ったんですけど、でも逆に言うと、他所から来た人を今まで受け入れてこれていなかったという。

西 山 そうなんですよ。年間で大体10件から15件ぐらい鍛冶屋になりたいっていう志望者はたくさんあって、地元の商工会に問い合わせがあるんですけども、現状刃物の需要がですね、特に林業用刃物の売れ行きが昭和の30年代、40年代、50年代、平成初期に比べたら大幅に減っていますので、鍛冶屋さんも食べていくのに必死な状態なんですよ。年配の親方は年金もらいながらできるので、自分一人やっていくんだったら良いんですけど、弟子を育てるとやっぱりどうしてもコストもかかりますし、受け入れ先がない状態がずっと続いておりました。

久津輪 実は進藤さんもそうやって鍛冶屋を目指して、他所から高知に行かれたんですね。

進 藤 そうですね。元々鍛冶屋になりたくて、北海道出身なんですけど、鍛冶屋になりたくて色々探して、探してくうちに自分がやりたい鍛冶屋のイメージが、多分高知が一番だろうって関で教えてもらって。

久津輪 最初に関市に来られた？

進 藤 そうですね。

久津輪 でも関市はちょっと鍛冶屋のイメージじゃない…。

進 藤 今はもう工業生産というかそういう刃物が多いんで、昔ながらの手打ちの鍛冶屋っていうイメージ



だったらもう高知に行った方が良いと言われて高知に行ったんです。10年ぐらい前なんですけど、その当時高知は全く受け入れ態勢が整ってなくて、一人前の鍛冶屋にはなれないって言われたんです。

久津輪 それで結局、問屋さんに勤務されて。

進 藤 問屋さんにちょっと募集というか、雇おうと思っている所があるという事で、近くにいたらチャンスが巡ってくるかなという考えでそっちに入っていました。

久津輪 で、それをやりながら個人的に鍛冶屋の勉強をしていたという事ですか？

進 藤 問屋さんの刃物の集荷とか注文に行き来したりとかで鍛冶屋さんとは仲良くなるので、それだったらここ空いているから貸してあげるよって言われて、家賃という格好で鍛冶屋の工房、場所を貸してもらって、土日にずっと練習して。

久津輪 ありがとうございます。という事で、課題の1つは後継者をどう育てていくかということだったと。もう一つはやっぱり需要だと思うんですけど、西山さん自ら現場を色々回っていらして、肌でどういう風に感じていますか？

西 山 私が入社した時が28歳ぐらいで今から12年ぐらい前なんですけど、その頃で2007、8、9年ぐらいですけど、あまりこう自分で営業していて、鉋類は今でも中部・関東・東北をメインに全国各地で今もまだ比較的売れているんですけど、斧に関しては1丁2丁と小口注文しか頂けない現状がずっと続いていまして。最近はまだ2010年から2020年まで10年経っていますが、やはりあまり増える傾向には全くないですね。林業で刃物を使う、先ほど江崎さんが仰っていましたけども、現場の林業のやり方が大きく変わっておりまして、やっぱり重機を使って作業しようというのは2010年ぐらいから本当に顕著に大きく現れてきてましてですね。それで手工具を使う傾向というのが、指導する方からも減っている傾向にあります。装備品で、一部こだわりを持って江崎さんの様に、林業の基本は刃物を使ってやるっていう、歴史的にそう習ってきてたんでそういうのを教えようっていう流れも無くはないのですが、やっぱり重機や機械が最初に使う道具だからと、機械はチェーンソー使うからと、そっちの研修は手厚くやっているけれど、手工具を教えるっていうやり方をちゃんとやっているという都道府県はあまり無いんじゃないかなと思います。ただ、本当は打刃物の使い方と砥ぎ方も教えてあげて欲しいという願望はあってもやれる現状ではないかなという風に思うのは、ちょっと悲しいですね。

久津輪 そうですね。でも、その林業が先がなかなか明るくないとしたら、高知県全体としてどっちの方向を目指していく感じなんでしょうね。

西 山 売上が伸びている刃物の種類と分野といえば、林業刃物でも一部あり、家庭用刃物でもあるんですけど、鉋とか斧とかは趣味でアウトドアでも使われていたりするような感じはあるので、そっちの路線では、まあ増えていって欲しいなという願望はあるんですよ。あと、ちなみに林業をやっている人でアウトドアが趣味って人はほぼほぼいないんですよ。仕事が林業だから、仕事がアウトドアだっていう事で。

久津輪 江崎さん、キャンプとかは（笑）？

江 崎 全くやらないです。

西 山 だから釣りが好きとか、ゴルフが好きって人は逆に多いんですね。で、BE-PALっていう有名な雑誌がありますが、たまに我が社の二丁差（にちょうざし）が出たりする事もあるんですけど、使ってますって事で。でも、取引先の人に見せてもBE-PALっていう雑誌初めて見たっていう人も多いんで。だから、やっぱりそこが全然リンクしていないんですよ。

久津輪 なるほど。ある意味新しいマーケットかも？

西 山 マーケットとしては、都会の人が趣味でアウトドアで使う道具として、鉋とか斧とかを使ってみませんかという売り込みは今後もっと力を入れていった方が良くないかという可能性は感じています。

久津輪 あと、私が高知県を回っていてあちこちで聞いたのは、包丁がものすごく売上が伸びているという事で、それは主に海外での需要が非常に高まっていると。まず日本食が世界に知られるようになった。あと、やっぱり腕によりをかけて良い料理を作ろうという世の中の雰囲気みたいなものも生まれてきた。そこで、日本の刃物が見直される様になった。だからもう作っても作っても足りないという話だと伺いましたね。

西 山 そうですね。海外の需要が伸びている要因として、日本食のブームも相まって、日本へ日本食を学びに修行に来られる外国人の方も増えておりまして。あと日本に留学する人たちも増えて、日本食に触れた人達が以前よりもすごく増えているので。そこで、やっぱり一番味に差が出るっていうのは、刺身なんですよ。刺身を切る時にやっぱりよく切れる包丁が良いと。まあ、ヨーロッパの包丁でもよく切れるものがあるんですけども、やっぱり和包丁の方が刺身の繊維を崩さないという事で注目を浴びて、日本食には和包丁が要るっていうのが今まさにブームで、結構アジアでもヨーロッパでも今比較的需要が伸びています。

久津輪 そういう後継者を育てないといけないという

事と、やっぱり新たな需要も生まれているので、そういう事にも対応しようという事で、この11月に鍛冶屋創生塾というのができたんですね。この、建物自体は真正面に見えてるドーム型のやつは…。

進 藤 刃物流通センター、協同組合（高知県土佐刃物連合協同組合）の建物ですね。

久津輪 協同組合が直販している建物。で、ここからは見えないんですけど、その裏側に建物を作って学校を作ったという。これ中の写真です。

ちょっと動画もあるのでご覧に入れます。

（動画再生）

久津輪 これまだ11月なので始まったばかりですね。

進 藤 叩き始めて、まだ本当に1週間2週間ってぐらいです。

久津輪 で、包丁を作っている。

進 藤 はい、包丁ですね。

（動画終了）

久津輪 これ、本当に学校が11月から始まったので、始まって1～2週間ぐらいのところで、包丁を作っているって事ですか。もう1本動画があるのでお見せします。これは鉋を作っている所ですね。

進 藤 鉋を鍛接、本当に昔ながらのやり方で作っている所ですね。

（動画再生）

久津輪 鋼を割り込んで入れている所。

進 藤 はい。

久津輪 これがホウ酸と？

進 藤 ホウ酸と鉄の粉を混ぜた接合剤、鍛接剤の粉です。

久津輪 柔らかい鉄と硬い鉄をこの粉で接合させるためのもの。

進 藤 そうです。これを1200度ぐらいまで上げると、鉄と鋼がくっつきます。

久津輪 火花が散って。

進 藤 火傷します、これ。

（動画終了）

久津輪 ということで、短くご覧いただきましたけれども、そもそもどういう経緯でこの学校設立まで至ったかというのは、ここの事務局長さんに詳しく話を伺ってきたので、ちょっと簡単にまとめてお話しすると、元々20年ぐらい前からこういう後継者育成とい



鍛冶屋創生塾の実習動画より



鍛冶屋創生塾の実習動画より

うか、鍛冶仕事のできる公的な施設が欲しいという事で、国の伝統的工芸品の支援の補助金を使って建物を建てようとして、そのために伝統的工芸品の指定を受けたんですね。それは1998年なんですけど、指定を受けたと同時にその補助金制度が無くなってしまって、建物が建てられなくなった。

西山 そうですね、年度変わりで。本当は2月に伝産（伝統的工芸品の産地）指定を受けたんですけど、年度って3月で終わって4月から始まる、その3月で打ち切られたっていうので。もう1年続いてくれたら、できていた可能性が高いんですけど。

久津輪 その後は、香美市ですね、市の補助制度で後継者を入れてくれたら月に10万円を雇い主さんの方に、事業主の方を補助しますという制度はあったんですけど、他所の知らない人を受け入れるというのはリスクがあるから、なかなか活用されなかったという風に聞いています。で、その代わりに市が息子さん達の世代を教えるのに月5万円の補助を出すという制度を作ったそうです。息子さん達もなかなかね、見て盗めと言われてもいろんな技術を幅広くは教えてもらえなかったというので、市の補助金で親達の世代から息子達の世代が技術を学ぶというのをやって、それは割と活用されたという話を伺いました。今度は2015年になって、高知県が後継者育成制度を作って、それは後継者側に月15万円、親方の方に月5万円の給付が出ますよ、というのをやったんですけども、その間に立ってマッチングさせる人がいなかったのでも上手くいかず、外から入って来た人と親方との相性が合わなくて、最初の方は半年で辞めてしまったという事ですね。ただ、今までに4人、うまくいって、その制度を活用して鍛冶屋になった人もいますかね。

進藤 いや、独立まではいつてないんですけど、まあ大体できるようになったかなという感じで、まだ引き続き親方から給料をもらって、頑張っているという人が4人ですかね。

久津輪 それでいよいよ、きちんとした学校の仕組みを作りたいという事で、先ほどの土地は組合が提供して、建物とベルトハンマーなどの機械は県と市で合計5200万円出してもらって新設したと。年間の運営費は伝統的工芸品の国の補助金「若手後継者創出育成事業」が当てはまる部分は国が3分の2を負担し、残りの3分の1は県が半分、市が半分。そういう形で運営を始めるという事にしたそうです。ただ、組合が学校を運営すると言っても全くノウハウが無いわけで、「じゃあ誰が先生やるんですか？」と聞いたら、鍛冶屋さんはたくさんいるから1週間交替りで先生に來



鍛冶屋創生塾の動画を見る

てもらって、週3回午前中に教える。で、残りの時間はひたすら教わった事を繰り返し復習するという。また次の週になると次の鍛冶屋さんが来て、というシステムでとりあえずやってみるという風に伺ったんです。そういう風に運営されていますか？

進藤 今のところそんな感じですね。1週間毎に先生が替わって、鍛冶屋さんそれぞれで細かい所の作り方が若干違うので、その辺は「目的がこうで、この鍛冶屋さんはこうやってるけど同じ意味合いだ」というように、研修生達がこんがらがらないよう導くというのが助手の仕事なのかなという風に思っております。

久津輪 ちなみに進藤さんはこの学校ができるにあたって、鍛冶の勉強もしていたし、助手としてフルタイムで働くという事になったと。

進藤 そうですね。本職の鍛冶屋、先生と言われている人達は、本職の自分達の商売があるので、ずっとは来れないという事で、常勤の、でもある程度やれる人、更にできれば鍛冶屋さんの顔が分かる人、という風に探して、ちょうど良いのがいると言われて、ご指名を受けた感じです。

久津輪 後継者の方達は応募が10人ぐらいあったんですって？

進藤 今回、鍛冶屋創生塾第1期生として3人入れるという事で応募をかけたんですけども、それに10名の方が応募していただいて。本当に皆やりたいという風に言ってくれて、こっちとしても落とすというのも本当に大変で、全員受け入れてあげたいという気持ちはもちろんあるんですけども、場所の問題だったり、いろんな問題で3人という事で。

久津輪 地元の人と県外の人、割合はどれくらいでしたか？

進藤 応募者ですか？ 応募者としては地元が4人でしたか。あとは大体県外の方が。大阪、東京がやつ



実習生の造ったまだ形の粗い鎌を見せる進藤さん（右端）



実習生の造った整った形の包丁を見せる進藤さん（中央）

ぱり多かったですね。

久津輪 受かった方達は？

進 藤 受かった方達は、出身地とか年齢とか、そこは何も考えなかったんですけども、たまたま高知の人が2人で、1人が神奈川の人になりました。

久津輪 年齢は？

進 藤 21、24、27ですね。

久津輪 皆さんどうですか？ 丸2ヶ月ぐらい終わって段階ですよ。

進 藤 本当に自分もど素人というか、全くやった事がない人を教えるというか、本当に初めての事なので。もちろんほとんど初めての人が多いんですけど、覚えが早く、自分としてはちょっと焦る気持ちもあります。

久津輪 （笑）助手が焦る。

進 藤 そうですね。「あれ、この工程に関してはもう抜かれたんじゃないか」という様な。そういう気持ちもちっとありますね。

久津輪 今日実習生が作ったものを持って来てくれたんですけど、まず一番最初の段階で作っていた、さっきの動画にあった包丁を見せて頂けますか？ 一番うまくいったやつ。

進 藤 これ、本当に一番最初の打ち初めのもので、包丁を作ろうとしたんですけど、ちょっとよく分からない形になっている。

久津輪 よく分からない形に（笑）。

進 藤 これなんか特に、もっとひどいですね。

久津輪 ちょっと高く掲げてくれますか？ 見えますか？ 包丁を目指していたけど…。

進藤 包丁を目指していたはずですね。

久津輪 五平餅みたいになってる。

進 藤 これが鎌。鎌を作ろうとして。まあ、鎌はこういうのも無くはないかなって所はあるんですけど。やっぱり狙った形ではない。

久津輪 これが11月ぐらいの。

進 藤 そうですね。これが11月、12月初めぐらいのもので。11月末ぐらいですかね。

久津輪 これは鉋？

進 藤 これは竹割鉋。鉋です。

久津輪 竹割鉋。両刃の？

進 藤 最初練習段階なんで、極軟鉄で鋼も入れずにただ形を作るだけの練習で叩いてます。

久津輪 で、最新のやつも持って来ていただいたんですけど。

進 藤 最新のやつがですね。とりあえず鎌がこうなりました。これはもう普通に売られてる鎌と変わりが無いぐらいのもので。これ、ちょっと焼き入れした後で、研いだら普通に刃が付くんですけども。そこまでいってます。これが包丁ですね。

久津輪 きれいな形になってますよね。

進 藤 ありました。まあ、どこから厚くなきゃいけないとか、どこが薄くてとか、その具合っていうのがちょっとあるんですけども、平面の形としてはもう、まあいけるかなっていう様な形になっています。で、さっきの動画にあった鋼を付けてたやつなんですけど、それがこの剣鉋、狩猟だったりアウトドアで使う様なナイフだったりになるんですけども、これに関しては自分で鋼をくっつけて、本当に昔ながらのやり方で作ったものなんですけど。まだ全然できないだろうと思ってたんですけど、案外できちゃって。

久津輪 案外できちゃった。

進 藤 これはこれで普通に商品になるんじゃないかってものができちゃってます。もちろん、10丁ぐらい作って、失敗が半分以上という中で選んできた良いやつなんですけど。

久津輪 まあ、プロの方と比べると時間もかかってるでしょうね。

進 藤 そうですね。今の状態じゃもう商売にはならないぐらいの時間をかけすぎているので。これも別の子が作ったやつなんですけど、形はもう良い感じにできてます。

久津輪 という事で、まだ本当に始まって2ヶ月なんですけど、何かちょっと明るい希望も感じるような報告でした。

進 藤 そうですね。

久津輪 今後、実習の予定としてはどういう風に進んでいくんですか？

進 藤 実習の予定としては、ちょっとその辺まだいろんな人との意見のぶつかりがあったりする中で。

久津輪 ぶつかり合い。それは講師陣の？

進 藤 講師陣の、「こうさせた方が良い、いやこうさせた方が良い」と、皆育てたいという気持ちがもう強すぎて、逆にぶつかるというか。

久津輪 逆にぶつかる。

進 藤 そういう事がありながら、この研修生達の上達具合とかも見て決めてこうかという感じで。とりあえず順番に2ヶ月毎に決めていく感じですね。

久津輪 あ、2ヶ月のスケジュールを。

進 藤 とりあえず組んでいって、それが終わったら次の2ヶ月のスケジュールを組んでというような事を今ちょっとやっています。

久津輪 もう本当に試行錯誤。

進 藤 手探りの状態ですね。

久津輪 手探りでって感じですね。期間は2年間で。

進 藤 今回は2年間。

久津輪 で、修了という事ですね。その後は独立という事になりますか？

進 藤 独立はちょっと先にはなるんですけれども。今、研修生達も、さっき話に出た補助金をいただいています、月15万円もらっています。ただ学校の運営費として、そこから研修生が学校にちょっと支払うという格好になっているので。その補助金をもらうと、条件というのがこの香美市に住民票を移して、香美市に住むっていうだけなんですけれども、2年間補助金もらうと、後3年間香美市に住んでないといけないという。その3年間の間に講師陣達からヘッドハンティングじゃないですけど、「うちに来い」みたいな声がかかるんじゃないかと。まあ、かけて欲しいというのは鍛冶屋さんに伝えてはいるんですけれども。そういう所で3年間、その所からちょっと給料をもらいながら引き続き練習するという格好です。で、5年後その補助金の括りが無くなった時にどうなるのかってというのは、まだ見通しが付いていないのが現状ですね。

久津輪 補助金としては当面5年間は継続っていう事なんですね。

進 藤 そうですね。

久津輪 はい、分かりました。ありがとうございます。西山さんのお父さん、西山武社長が塾長さんですね。

西 山 そうですね。

久津輪 で、塾長さんとお話した時には、これ、とりあえず組合の裏に仮で建てたけれど、本当はもうちょっとしっかりした設備を作って、もっと受け入れていきたいんだというお話もされていましたね。

西 山 そうですね。本当は使いたかった候補地が空いていたんですけど土地を新たに取得しないといけない、予算がその倍ぐらいかかるという事で、予算的な面で頓挫したというか。今の土地だったらそのまま使えるからということです。ま、(組合から)借りてるんですよ？

進 藤 借りてます。(創生塾から組合が)家賃をちょっともらってという。本当は香美市長としては、これで成功したら新しい、もっとでかいものを作るという二段階で考えていらっしゃる。とりあえずこれは仮で。

久津輪 あ、そうですか。

進 藤 とりあえずこれは仮で作って何年かやって、上手くいくぞという確証が得られたらもっとこう大々的にやるという様な流れに。

西 山 そういう話があります。

久津輪 ちなみに今回このお話を伺いに行った時に、主に対応してくださったのは門田貴司さんという鍛冶屋創生塾の事務局長さんなんですけど、その事務局長さんは元々は香美市の商工会にいらして、20年以上にわたって刃物組合のいろんな事務作業を受託してやっていたという方です。その方が定年退職して、組合の方に移られて、鍛冶屋創生塾の立ち上げにかなり深く関わっておられる。そういう行政の補助金のいろんな申請の仕方とか、国や県との繋げ方とか、詳しく知っておられる人がキーマンとして入っているという事が、相当強いのかなという風に思いました。

西 山 そうですね。今回この塾ができた経緯も、今まで20年前からずっとアピールはしてきてたんですが、県も市もそんなに乗り気ではなかったんですけど、尾崎前知事が、すごくバックアップしてくださって、そこで風向きが一気に変わりました。最後に、去年開校に至ったんですけど、2年前ぐらいから作る方向に一気に流れが変わったのは、前知事のおかげがすごく大きいですね。

4. これからの林業に手道具は？

久津輪 ありがとうございます。さて、江崎さんも残っていただいているので、まず江崎さんに感想など伺おうと思うんですけど、ご覧になってどうですか？

江 崎 そうですね。やっぱり僕達は使う側としてあれなんですけど、やっぱり頑張っ^て欲しい、作る人は頑張っ^て欲しいっていうのはありますね。

久津輪 刃物を作る側の方達から、林業現場の方達に何かお聞きになりたい事とか、リクエストとか何かあったりしますか？

進 藤 さっきも外で立ち話したっていう話ですけど、こう「こうして欲しい」という話が、近くの鍛冶屋さんじゃない限りこっちまで届いてこないって事がほとんどなんですよ。なので、お互いの不満とかそんな情報が結局合わさる事なく、良いものに繋がらずに終わるという。やっぱり近くにいないというのはそういうことになるのかなという風には思うので。もうちょっとこう、いま便利な SNS などもあるので、そんなもので作り手と使い手が繋がれたら、とかは思いますよね。

久津輪 江崎さん、ちなみに SNS は？

江 崎 一切、無いです。

久津輪 ラインはやってますね（笑）？

江 崎 ラインだけしかできません。アナログなんで申し訳ないです。

久津輪 他に何か、こう上手く使い手と作り手が繋がる…。

西 山 先ほど、さっきのワイヤー刺しの要望もあったんですけど、この木を転がす道具の^{とど}薦の話もそうですけど、大体ある程度メーカーによって形とサイズ規格などは決まっていますし、地域性、鎌などはすごく地域性に富んでいるんですね。^{とど}薦の形も西日本と東日本でまた違いますし、北海道も違う。特に鋤は何千種類もあるぐらい地域性に富んだ刃物なのですが、それぞれの地域性が今まではあったんですけど、地域の野鍛冶たちがどんどん引退し廃業している現状なので、それがちょっと淘汰されつつはあります。やっぱり使って便利な形っていうのは地域に根付いているので、それをちゃんと受け入れて作るというのを得意としていたのが土佐打刃物なんですけど、ただそれが最近ちょっと薄れてきている所が若干ありまして。こっちの形を押し付けるというわけじゃないですけど、定番の形というのが地域によっ



会場に展示した西山商会で扱う土佐の打刃物



会場の様子

てあるというのを、やっぱりもう一回見直してやっていかなきゃいけないかなという風に感じています。昔うちのお客さんは国有林の仕事をしている人達が8割だったんですけど、国有林事業が、営林署から森林管理局に変わった頃からどんどん現場で働く人が引退し減っているの、その林野事業でやっている人も正規雇用でも5万人ぐらい林野庁の職員さんはいたんですけど、今や林野庁全体で合わせても5000人いるかいないかぐらいなので10分の1に目減りしている。それだけ刃物の使い手も減っているし。で、林野庁だったら手工具は指定型で、この形じゃないと絶対ダメというぐらい縛りがきついので、そういう形を得意として作っていたんですけど、それが減っていったのもあって、量も減っていったものもあります。まあ鍛冶屋さんでも面倒くさがったのもあると思うんですけど、1本から作れるという土佐の売りにしていたものがないがしろになってきている感はちょっとあるので、そこを引き締め直して作っていかねばいけないかなと思っています。引き締め直して。

久津輪 土佐は、いま仰られたように自由鍛造と言って、型にはめたり、型で打ち抜いたりするんじゃないくて。

進 藤 フリーハンドで。

久津輪 フリーハンドで打っていく。

進 藤 どうとでもなると。

西 山 斧に関しても、後ろにうちの製品を並べてあるんですけど、刃物の名前に地域の名前がついているものがたくさんあるんですよ。斧は斧でも、木馬斧(キンマ)っていうのは道具、木馬(キンマ)という山の本を転がす道具があるんですけど、それを作るための道具でキンマ斧と言っているんです。また、吉野斧というのが通称であるんですけど、枝打ち作業で使うもので、奈良県の吉野地方でよく使われているから吉野斧っていう名前があって。鋏に関しても地域の名前がついているものがたくさんあります。

質疑応答

久津輪 ありがとうございます。会場からもしご質問とかご感想とかあればお受けしたいんですけど、どんなかいらっしゃいますか？遠慮なく、よろしいでしょうか。

会場から 3人の鍛冶屋さんを選ぶ基準というのは、どうやって。

進 藤 研修生の？自分も面接に同席させてもらったんですけど、結局根性があるかどうかみたいな所があります。

久津輪 根性。

進 藤 結局鍛冶屋の仕事、3Kと言われてるような、危ない、汚いとか、火を使うんで暑いとか。なので、やった事ない人達にとっては、多分実際にやってみないと分からないと思うんですよ。それを耐えられるかどうかという。やる気がそれをちゃんと上回っているかどうかという所を見たのと、ぶっちゃけ将来性的なことを見た所はあります。

久津輪 将来性という？

進 藤 将来何を作りたいのかというのが、あまり土佐に合っていない人というのがいたりしたので。あと、年齢はあまり見たくはなかったんですけど、結局若い人の方が飲み込み早いんですよね。できれば若い子を探りたいという気持ちもありつつ、若い子を探りすぎると若いので方向転換できちゃうので、辞める可能性も高いんじゃないかっていう葛藤とがメインですね。まあ、ほとんどはもうガッツがありそうかどうかという所で決まっています。

久津輪 ガッツは面接で、印象で？

進 藤 もう印象ですね。ただ、印象なんですけど、面接官が何人も、8人ぐらいいる中で、何故かほとんど、人に対する評価、皆大体同じで。皆、「やっぱりこの3人かねえ」というのが、ほとんど揉める事なく決まってしまうました。

西 山 開学まで2年くらい待ったという人もいました。

進 藤 ああ、そうですね。応募があった時に、ひょっとしたら何年後かに鍛冶屋創生塾始まるから、それまで待てるかって言って、その間ずっと待ってた子もいたりとか。

久津輪 ああ、確か香美市に移住してきて。

進 藤 そうですね、移住してきて、もう家も買ったっていうようなそんな特殊な子もいます。

久津輪 その人は選ばれたんでしたっけ？

進 藤 その人はトップで選ばれましたね。

久津輪 トップで選ばれたんですか。ガッツですね。

進 藤 そうですね、その気合を見せられるとこっちも引けないというか。

久津輪 よろしいですか？他に質問いかがでしょう？水野さん、何かご質問になりたい事とか。

水 野 (新潟県長岡市の鉋鍛冶の水野清介さん) いやまあ、色々聞かせてもらって、俺も今回ちょっと頑張ろうかなと思ってここへ来たんだけど。久津輪さんから電話もらって、「来いよ、絶対良い話聞ける」って。まあ、先輩じゃないですか。鍛冶屋じゃなくて、そういう学校を作った…。

進 藤 ああ、土佐はそうなりますかね。

水 野 だからそういうのをいっぱい聞きたいなと思って、ここへ今回参加させてもらって、いま聞いて、本当、弟子が来たらどうしようって、逆に不安になってます。

久津輪 (笑) 逆に不安になっちゃった。

進 藤 今までの、昔ながらの弟子の受け入れ、1対1というのが、結局その中で人間関係が完結しちゃうので。多分教える側としても、教わる側としてもこう逃げ道が無くなっちゃうというか、お互いへのプレッシャーがすごいんですよ。今回、土佐のやり方は、皆にも責任を分散させようという事でこういう格好にしたという事があります。

久津輪 やっぱり過去の補助金の制度で、1対1で失敗した例もあって、それも踏まえてという事ですね。

進 藤 技術とかそういう事じゃなくて人間性が合わずに、ちょっともう無理ってなった人もいますので。そこをなんとかするにはこういう制度が良いんじゃないかという事で。

久津輪 という事ですね。その他ご質問いかがでしょうか？

会場から 江崎さん、たくさん道具種類持っていってしゃるんですけど、四代目ですよ。

江 崎 はい。

会場から まだ全然使い方が分からない道具とかあったりするのか、それから普段現場で使っているものは、どれくらいの数があるんですか？

江 崎 まず第一に自分の所にあるものはほとんど熟知しております。今の、お祖父さんから受け継いだやつ、親父から受け継いだやつも全て使ってますし、使い方も分かります。ずーっと小学校とかで見ながら覚えてたんで、今のチェーンソーの目立て、こういうのの目立てもお祖父さんの背中におぶわれて、お祖父さんが目立てしている所をイメージしてたんで、それなんで鋸とかも目立てが全部自分でできます。という事と、もう1つ何でした？

会場から どれくらいの数、ですかね。使ってみるのは。

江 崎 数は…すごいですね。すごいです。

会 場 (笑)

江 崎 そうですねえ、もう100じゃきかないですね。小道具っていうか、手工具ですね。トビだけで、どうですかね、40本以上ありますね。転がしトビ、中径木、小径木、大径木、全部変えてますので。鉋も20丁以上、鉋の産地でどうなのかっていうのと、教える立場になりますので、どこの会社のどこの鉋がど

ういう風な鋼を使っているかというのと。あと僕いま、研ぎ師の所に習いに行ってます。で、砥石ですね、砥石がどこの産地でどこの砥石が合うのかっていうのもいま勉強してますので、自分なりに。なんで、全てですね。今、ヨキも40丁以上ありますし、いろんなものでちょっとマニアックって言われてますので、結構あります。はい。

久津輪 ありがとうございます。では、大体この林業パートは時間になりましたので、ここで一旦休憩に入らせていただこうと思いますが、西山さん、進藤さん、江崎さんに拍手を。それでは、休憩に入ります。会場の皆さん、ぜひパネラーの方を捕まえてお話してください。

5. 木工・大工の道具を使う ～岐阜県の大工

久津輪 では後半の、今度は木工とか大工の木の仕事に使われる道具のお話を進めていきたいと思います。後半、一番初めに高山から大工さんに来ていただいています。川上さん、ご登壇ください。自己紹介をお願いします。

川 上 岐阜県の高山市から来ました大工をやっている川上舟晴と申します。どうぞよろしくお願い致します。

久津輪 川上さんは元々高山のご出身？

川 上 そうですね。生まれが高山で。

久津輪 元々家が木工さんの家系ですか？ お父様も大工さんだったとか？

川 上 実家は板前をしまして、僕はそこの次男坊だったんで、後継ぎとかっていう話ではなく、好きなことやっていいよっていう話でした。

久津輪 それで木工芸術スクール、高山の職業訓練校に行かれた。

川 上 そうですね。

久津輪 それから、三重県の伝統建築の、社寺建築の会社に入られたと。

川 上 そうですね。三重県桑名市にあるんですけど、社寺建築を専門でやってる親方に弟子入りをしたという形になりますね。そこで9年間社寺建築をやらせていただいて、一通り修めたなという所で地元の方に戻りまして、また大工を続けようと思いました。帰ってからですね、飛騨の高山の方では社寺建築の需要がなかなか無いもんですから。

久津輪 そうですか？

川 上 はい。住宅も僕の中では、木造建築の部類ではやっぱり勉強しておきたいなということで、高山に帰ってからは木造住宅を勉強して、今はどちらもやっています。

久津輪 ちなみに高山の職業訓練校卒業後、三重県の方を選ばれて行かれたのは何か理由があったんですか？

川 上 選んでいる時に社寺建築というのが1つのキーワードだったんですけど、県内もそうですし県外も社寺建築をやっている会社ないし親方みたいな方に会ってご挨拶させてもらう様な探し方をしていたんですけども、パッとくる所が三重県だったという事です。

久津輪 グッとくる所が三重県だったと。

川 上 はい。



岐阜県高山市の大工、川上舟晴さん（右）

久津輪 そもそも社寺建築がやりたいというのは？

川 上 社寺建築にこだわりを感じたのは中学校3年生の時、自分の進路を考える時に大工になりたいと。で、先生に相談した所、「お前の思っとな、そういう手道具を使う様な大工ってのは社寺建築とかしか無いんじゃないか」っていう、たかだかその一言で僕は、「あ、じゃあ、社寺建築行ってみようかな」という風に思いました。

久津輪 なるほど。もうその頃から手道具が使いたかったということですか？

川 上 そうですね、憧れみたいな感じで。ちょうど僕が中学生の時に西岡さん…。

久津輪 西岡常一さん。

川 上 そうです。宮大工の、法隆寺の西岡さんの特集をテレビでいっぱいやってまして、もうモロにその影響を受けまして。なんて格好良い仕事だと思って、親に相談したんです。中学校の時に「僕は社寺建築がやりたい」って言ったら、「ああ、お前、もう保育園の時から言ってたわ」みたいな事を言われまして。

久津輪 はあ、そうですか。

川 上 どうやら、ちっちゃい時から大工をやりたいって言っていたみたいです。

久津輪 で、川上さんのお仕事ぶりも動画で撮影させていただいたので、短いんですけどもご紹介します。

(動画上映)

久津輪 これ、お仕事場は製材所を借りてやってらっしゃったんですね。

川 上 そうですね。材料を買って、その工場を貸

してもらおうというシステムですけど。

久津輪 これ、何を作っている？

川 上 これは社寺建築で言われる軒先の模型を作っています。

久津輪 文化財修復の資格を取る試験を受けるための課題だと聞きましたが。

川 上 そうです。日本伝統建築技術保存会という会がありまして、そこで文化財修復の講義を受けるんですけど、その研修課題の一環として墨付け、規矩術、刻み、模型を作るという一連の流れの課題ですね。それを製作しています。

久津輪 あれは隙間がぴったりつかないといけないですね？

川 上 そうですね。それを合わせる工程を鉋で削ってやっています。

(動画内コメント)

川上 (手道具を見せながら) まっすぐじゃないんですね。ちょっと反っている。で、これがきつめの反り(鉋)。で、平(鉋)なんですけど、やっぱり木口は抵抗が大きいんで、寸四とか寸二で取ると楽です。こっちは仕上げといいですか、あれ(茅負いの模型)全部中仕込(鉋)なんですけど、仕上げなくて良いって話なんです。なので、仕上げ(鉋)と中仕込(鉋)の間ぐらい。あと、追入鑿と墨壺、縦横の付いてる鋸ですね。これ、七寸目ぐらいかな。という道具を使います。今の茅負いだけでこれだけが必要です。(鉋を見せながら) 反りも全体的に反ってるんですけど、違いますよね、先ちょっと元では。で、全てをこれで行ける事はいけるんですけど、ガタガタなったり、精度が悪くなったりします。で、ねじれが出てくると今度、こっち(鉋)も丸いやつじゃないと鉋屑が出ませんので、またそれはそれでこういう物(小鉋)が必要になってきます。(鑿を握りながら) これ不思議なことに、こう置いてあって、他人のこの同じ様な鑿が置いてあって、違う方を握る

と「あ、違う」と。で、自分のを見つけると。市販のものでも慣れてくるともう手に馴染んじやいますので、他人の道具との違いが分かると。鉋もそうですね。本当に微妙なんですけど、この面の取り方とか握った重さなんかでも、「あ、これ、僕のじゃない」って分かりますし。(鉋を見せながら) これは自分で、好きな加工面に合わせてアールを作ります。これも自分で作って。だから自分で作る、ないもの、足りないものはやっぱり作りますし。間に合うものはそのままいきますし。

(動画終了)

久津輪 はい、ということで、たくさんの道具を使う所を見せていただいたんですけど、先ほどの江崎さんと同じ様に、自分で道具をカスタマイズして作るというのもあるし、逆に今のお話だと自分の手が道具にも馴染んでいって、同じ市販のものでも識別できる程というのもあったりするんですね。

川 上 はい、やっぱりその、そこに差はないんですよ。やっぱり自分で使い込んでいる道具なのか、そうではないものなのかっていう差が、手には馴染んでいるかなとは思いますが。で、先ほど江崎さんも言ってみえた様に、その手に馴染む様に、使いやすい様に、怪我をしない様に、手にフィットさせる様に自分で仕立てを変えていくっていう事が必要だと思います。

久津輪 今は社寺建築と一般住宅と両方やっていらっしゃるんですけど、一般の住宅で、手道具はどれくらいの頻度で使います？

川 上 そうですね…。僕はできるだけ使いたいと思っている方なので、鑿^{のみ}であったり鉋であったりは使える所を探して。ここはこういう風に見せたいっていう思いがないと、なかなか道具箱から出てこないものなので。僕はできる限り使おうと思って使っています。

久津輪 思いがないと出てこない？

川 上 出てこないですね。やっぱりただ単純にス



川上さんの仕事の様子を撮影した動画

<https://youtu.be/cX2cVj3DO1A>



ピードとか、生産性の事だけを考えた時に、じゃあその選択の中に手道具が入ってくるかという、そのほとんどが機械道具だったり、エアー工具で賄えるもの、ないし、それだけで組める様な家になっていますので、今は。なので、使い手が使おうと思わないとなかなか出てこないと思います、現場の中では。

久津輪 川上さんの場合は使いたいと思う場所というのは、例えばどういう時、どんな仕上げを施したい時に道具を使うという感じですか、今？

川 上 新建材と呼ばれる、MDFであつたり、ま、木ではないものを内装材に使うのではなくて、できるだけ自分の仕事の場合であつたら、やっぱり無垢の木のを仕上げの表面に持ってくる様な格好にして、なおかつそれをサンドペーパーではなくて、鉋で仕上げてみるのか槍鉋で仕上げるのか、っていうチョイスを自分の中でして、できるだけ手道具を使おうとしています。はつってみるとか、そういう事ですね。

久津輪 やっぱり木の表情を引き出そうとか、手触りとか、そういう事でしょうか？ どういう事なんでしょう？

川 上 そういう思いもありますし、いま僕はそれの答えまではいってないんですけど、自分が良いと思うのはやはり手触りだったり、足触り、柔らかい感じであつたり、部屋の中に入った時の匂いであつたり、空間の音の感じであつたり、もう全部含めて僕は良いと思うんですけど、その思いが他の施主さんに伝わるかっていうとなかなか難しいところで、逆に説明するのも難しいんですね。なので、色々試してみながら、何が木工を知らないお施主さん達に刺さるのか、刺さるというか、気になってもらえるのかなというのを、いま試しているような状態ですね。

久津輪 川上さんの様に手道具に対するこだわりがなければ、もう一切手道具なしに家を建てる事も今はできちゃう感じですか？

川 上 建ちます。ほとんどの家が建てられると思います。まあ、住宅にも種類がありまして、新築で建てる場合、やっぱり伝統建築と呼ばれている様な土壁造りの家ですよ、でしたら絶対手道具は出てくるであろうと思います。僕らの地方で言いますと古民家改修とか、社寺建築で言われる屋根替え工事、古いものを触るという場合は、やっぱり手道具が出てきます。ただ、ハウスメーカーだったり、今プレカットで新建材で作れる様な家っていうのは、手道具が無くても建てられる様な仕様にはなっていると思います。

久津輪 でも、社寺建築みたいなものになると、手道具の出番が多くなるっていうか、もう無しでは作れないような感じですか？

川 上 そうですね、機械道具だけでは絶対に作れないと思います。これはまあ、実体験ですけども。皆さんも家の近くに寺とか神社があると思いますけど、どの屋根もまっすぐな屋根ってないと思うんですね。もっと言うと、窓が丸かったり、火灯窓^{かとうまど}があつたり、そういう曲物^{くせもの}と呼ばれるようなものがあるので、そういう所では絶対使用しなきゃいけない。使用しないと綺麗に物作りができないと思います。

久津輪 文化財の修復の資格を取ろうとしていらっしゃるのも、やっぱりそういうところですか？ 使う機会を増やしていきたいというか。

川 上 そうですね、使う機会と言いますか、僕は、社寺建築とともに文化財修復に興味がありまして。で、高山市にもたくさん文化財があるんですけども、正しい知識を持ってない方が修復されると、やっぱり文化財としての価値がどんどんどんどん低くなっていくと言いますか、崩れていく場合もあります。なのでそういう意味合いも含めて、僕はその、資格では無いんです、ただ認定なので。そういうちゃんとした団体が行なっている講習会に出て、そういう修復の知識をですね、僕の知らないような知識を知りたいなという事



川上さんの仕事の様子と愛用の手道具

で今、個人的には受けてます。

久津輪 川上さんはですね、大工さんの調査をしている時に高山の道具屋さんにもまず行って、道具屋さんから推薦してもらったんですけど、一番最初に「高山と言ったら川上さんに聞くと良いよ」と言われて、お話を伺いに行ったんですね。それは今見ていただいた様に道具にこだわりを持って使っているという事だけではなくて、実は高山地区でそういう伝統技術を次世代に継承しようとする活動のリーダー的存在でもあるという事で、それをちょっとご覧にいれようと思います。

これ、「全国削ろう会」という、お聞きになった方も多いんじゃないかと思いますが、もう 20 数年前から続いているんですね。全国的な、鉋で削る会の飛騨高山大会というのが 2016 年にあって、その実行委員を務められたんですね？

川 上 そうですね、その事務方ですね。この大会を誘致して、その段取りをするという実行委員の方をやらせてもらいました。

久津輪 川上さん自身は削ろう会にはいつ頃から入っていたんですか？

川 上 見に行く事はしてたんですけども削ろう会には入っていませんでした。

久津輪 あ、そうなんですか。

川 上 それこそ、その道具屋さんからの一声で。2016 年なので、2014 年ぐらいの時にですね、削ろう会を高山でやるから実行委員一緒にやってくれないと言われてから、本格的に削ろう会というのを勉強と言いますか、調べました。

久津輪 実際に自分自身が会に入ってみて、まずどうでした？

川 上 正直見てるだけ、その会に入っていない状態で削ろう会を外から見た時には、皆さん薄い鉋屑を出そうと頑張ってるんですけど、まあその頃から社寺建築とかやっていて、「そんなに薄い鉋屑出しても、仕事でそんな薄くしないのになあ」とかっていう、そういう気持ちはあったんです。でも、削ろう会の実行委員を通して、真剣にやっている競技者の方もそうですし、いろんな境遇があつてこういう会に顔を出している方との触れ合いとか、それに対する姿勢を見ていまして、こんなに熱いものはないな、と。全然、僕の気持ちも 180 度変わりました。端から見ていたんじゃないで、その中に入って技術を教えてもらったり、教えたり。じゃあ、それを自分でどう使うかっていうのは自分の問題なので、それを仕事に活かしていこうと思いました、僕は。

久津輪 なるほど。私も今まで 3 回行ったことがあり



ます。全国持ち回りで大会が年 1 回あるんですけど、関市でも 10 年程前に大会があつて、その関と神戸と、あと今年長野県の伊那市であつたので、それを見に行ったんですけど、まあ、とにかくすごいです。この写真にある、この時何千人来たんですかね？

川 上 競技者だけで 800 人。周りを見に来る観客さんを入れて、2 日間で 1 万人来ました。

久津輪 2 日間で 1 万人。今年の伊那は 2 日間で 2 万人という話も聞きました。で、日本全国の工務店の大工さんとか、木工職人さんとか、あるいはアマチュアの方もですね、来られて、鉋の研ぎを一生懸命勉強して、極限まで薄い削り屑を出す。で、それを計測するんです。そういう競技会が行われていたり、外ではこういう鉋まさかりではつったり、鉋ちようなではつったりとか、そういうデモンストレーションですかね、が行われていたり。

久津輪 これは何でしたでしょうか？

川 上 これは削ろう会の中でも有名な記録を出せる方とか、その会その会で講師としてですね、「この人の話を聞きたいな」という方が集まって、研ぎの講



2016年 全国削ろう会 飛騨・高山大会



2016年 全国削ろう会 飛騨・高山大会

習会をしている所です。なので、先生であるんですけど、一緒にの競技者であって、こっちの聞いている人たちは生徒であるんですけど、一緒にの競技者でもあるという、なんかお互いに教えている様な講習会でしたね。

久津輪 熱気がすごいですよね。

川 上 すごいですね

久津輪 あと、これは子供に削ってもらっているのかな？

川 上 そうですね。飛騨高山大会をするにあたって、参加者の方は勝手に来るんですけども、それを見に来てくれる方というのはやっぱり啓蒙活動をしなかなかなか、この全国削ろう会っていう名前を出したところで知っている方っていうのはほとんどいないんですよ。なので月に1度、半年間ぐらいかけて、高山のいろんな所でこういう削りのデモンストレーションをさせてもらいました。その中で、お子さんと家族づれの方が一番食いつきが良くって、「僕にも削らせて」という所をちょっと写真に撮らせてもらった所です。

久津輪 なるほど。先ほどの1枚めの写真なんです

けど、これ、一番右下の所とか左下とかを見ていただきたいんですけど、道具屋さんが出店されてるんですね。鍛冶屋さん達が自分の作った鉋とか鑿を持って、会場にいらしてるんですね。で、鍛冶屋さん達にお話を伺っていても、「この削ろう会がどれほど大きな役割を果たしたか分からない」、「削ろう会が無かったら自分達の仕事はもう10年前には終わっていたかもしれない」と仰る方が何人もいたんです。というのは、さっき林業の方でもお話がありましたが、鍛冶屋さん＝道具を作る人と使う人がだんだんやっぱり産地化して離れていってしまっ、間に問屋さんも入るようになって、道具を作る人は直接使う人の評価を聞く機会がなくなった。リクエストとか評価とかを聞く機会がなくなったんですけども、この削ろう会は鍛冶さんが直接現場に出て行って、直接道具を使っている人とコミュニケーションが取れる。そこが大きな役割を果たしたと仰る方がたくさんいらっしゃいました。

川 上 そうですね。使う方から言っても、直接名前しか知らない、顔があんまり分からない鍛冶さんが目の前にいて、こう語りかけられるっていうのはすごく良い機会かなと思いました。

久津輪 で、この削ろう会の後も、高山で若手の人達でこういう伝統技術の継承をやっていこうよと言って勉強会を企画されたりもしていたそうですね。

川 上 そうですね。道具の研修会とか、それこそ削り会と呼ばれるやつを高山で、ローカルで作ってみようというので一度動いてみました。

久津輪 でもなかなか難しいところもあったとか。

川 上 難しいですね。やっぱりこの手道具に興味ある人がどれほどいるのか、大工さんの中でも今言っみたいにどのくらいの気持ちで現場に道具を持って行っているのかとか、道具の事をもっと知りたい人はどのくらいいるのかという所でつまづきましたね。なかなか集まらないです。集まっても続ける事が難しかったですね。

久津輪 で、今はとりあえず単独で、子供向けの活動をやっていこうとされているというお話でしたね。

川 上 そうですね。そこで人を集める事の大変さですね、人をまとめる大変さっていうのを本当に痛感しまして。じゃあ、自分の個人レベルでどういう働きが一般の方達にできるかなあと考えまして、今は僕1人大工と左官屋さんの友達を1人引っ張って行って、保育園に対して伝統建築で動物小屋を建ててみようよというイベントを企画してまして。僕が大工になりたかったきっかけが、やっぱり保育園の時に自分の家

を建てに来た大工さんに憧れを持ったというのが1つの経緯だったんですね。僕、やっぱり大工さんが減っているのもそうですし、伝統建築を作りたい、建てたいという施主さんも少なくなっている中で、じゃあ、僕個人がどういふ啓蒙活動をすればちょっとでも貢献できるかなと考えた時にそういう事を考えました。

久津輪 伝統建築の動物小屋って、すごいですね。

川 上 楽しいと思います。本当に釘とか使わずに軸組に建てまして、で、左官屋さんには泥を持ってきてもらって、子供達に手で泥を壁にこうぐちゃぐちゃ塗ってもらおうというのを今企画しています。で、その中で、伝統建築の良さはやっぱりパズルだったり積み木のようにホゾを差して組んでいく楽しさ。あと、目の前で鉋で削ってみて、ヒノキってこんなに良い匂いなんだよ、と。

久津輪 まさに先程の写真のように。

川 上 ああ、そうですね。で、こんなにツルツルになるんだよ、土はこんなに臭いんだよっていうのを、そういうレベルで。伝統建築は何々がすごくて、どういう風にこういう歴史があって、ではなくて、感覚的に子供に訴えていけないかなあと思って、今考えています。

久津輪 あともう1つ、川上さんがやっていらっしゃる活動があります。これは高山市内にある、岐阜県が管理している建物で、高山陣屋という江戸時代の建物があるのですが、これが昔からサワラとかネズコとか、そういった針葉樹の木を、丸太を刃物で割って、へいで薄くして、それを屋根の板にしているんですね。それを定期的に葺き替えていて、陣屋の中に県職員で専門の営繕手さんもいらっしゃるんですね。

川 上 そうです、はい。

久津輪 その営繕手さんが大工さん達に声をかけられてこの研究会が始まったと。

川 上 そうですね、その営繕手の方からこの板を作る職人さんがもう飛騨にいなかった、最後の1人の方がもう亡くなってしまったという話を聞きまして。社寺建築をやっていると分かるんですけど、柿葺こけらぶきというものがあるんですね。ですけど、この飛騨の高山で使われている板というのは柿とはちょっと違うサイズ感の板を使っています。なので、その営繕手さんの言われるには、やっぱり飛騨のこの独特の工法ですよね、手法を飛騨にいた大工さん達、飛騨にいた方達に守ってもらいたいという思いを聞きまして、じゃあ同じような思いがある大工さんに声をかけまして、「**くれ**博へぎ研究会」という名前をつけて立ち上げました。最初は



この板を割る事、板を作る事だけを考えて集まったんですね。なので、これ、板割りの研修をしています。

久津輪 でも職人さんが亡くなられてしまった後からだったので、その道具をどう調達して、どう使うかというのを探ること自体が大変だったとかつて聞きました。

川 上 そうですね、その亡くなった職人さんは弟子を育てることなく引退されたんですけれども、飛騨のこの板を割るには、他の地域とは違う道具を用います。それを復元という形なんですけど、現存するものがほとんど無かったので、いろんな鍛冶屋さんを当たって、文献を調べまして、どんな形だったとかどんな長さだったというのを調べる所から始めました。

久津輪 それが、これですね。

川 上 そうですね、これがマンリキと呼ばれる、これで板を作っていくんですけれども、これ作るの大変だったんですよね、はい。

久津輪 注文してすぐできたという訳ではない？

川 上 注文して、自分の思いは道具屋さんに伝えるんですけれども、返ってくる道具が自分の思っているのとは違うものが作られてきまして。例えば、これはヒツ（柄を通す穴）の所がテーパー（先細り）になっていまして、下側から柄を入れるつもりだったんですけど、鍛冶屋さんは逆にテーパーを付けてきまして。「これ、言っとんのと違うわー。ちょっとやり直してー」と言ったら、根元をちょん切られまして、反対にして溶接したものが返ってきました（笑）。ちょっと思いが違うんだけど、まあ使えるからいいわ、と思って今は使っています。

久津輪 なるほど。まあ、なかなか見ない形ですからね。

川 上 そう、そう。

久津輪 逆さにイメージしてしまうのも無理はないかなという。

川 上 そうですね。

久津輪 ちなみにこれは、海外では屋根板をへぐのによく用いられる道具なんですけど、日本では高山地方にしか見られない道具だというのが、専門家の方の文献にあります。で、この樽へぎ研究会も結構大変なんですね？

川 上 大変です。やっぱり人が集まりだすといろんな思いがありますし、大工さんなので平日はやっぱり自分の大工仕事をしていますので。だからどのタイミングで皆で集まって勉強会をするのか、誰がこれを研究して、誰が鍛冶屋に注文するんだとか、もう全ての工程に対して大変でした、はい。



川上さんの話を聞く会場の様子

久津輪 今、現状ではボランティアでやっている？

川 上 そうですね。全くお給金をもらわずにやっています。で、1つの目標としまして、やっぱり研究をするだけではなくて、この先にこれを仕事に、これで食べていける様な、板を売れる様な環境を作っていきたいなと思ひまして。最終的なゴールはそこなんですけれども。で、今やっとなで、ちょっとずつ自分達の作った板が施工する側に売れるような体制になってきました。

久津輪 県が入札で買っているんですけど、その高山に最後にいらっしゃった職人さんが亡くなってから、今は主に高山市の外の業者さんが納めてらっしゃるんですね。

川 上 そうですね。

久津輪 それをなるべく高山の中の職人達でやっていけるようにしたい。

川 上 はい。

久津輪 はい、ありがとうございます。

6. 木工・大工の道具を作る ～新潟県・越後与板打刃物

久津輪 ではここで、今度は道具を作る側の職人さんにも加わってもらおうと思います。では、水野さんと千代鶴さん、壇上の方をお願いします。拍手でお迎えください。それぞれ自己紹介をお願いします。

水 野 鉋鍛冶をやっています、新潟の水野です。よろしくお願いします。

千代鶴 同じく鉋鍛冶をやっています、兵庫県の三代目千代鶴貞秀と言います。よろしくお願いします。

久津輪 ここでちょっと皆さんにお詫びというか、水野さんにお詫びなんですけれども。今回のこのパネルディスカッションを企画していて、実はチラシができ上がった直後に、水野さんがなんとクラウドファンディングを活用してお弟子さんを育てるという取り組みを始められたというのを聞きまして、で、急遽パネラーに加わっていただいたので、水野さんだけチラシに載っていないんですね。急遽来ていただいたという。本当にどうもありがとうございます。で、水野さんがお仕事をしていらっしゃるのは新潟県の長岡市なんですけれど、そちらの方にも調査で伺ってきたので、その概要だけちょっとご説明したいと思います。

場所がここですね。元々は与板町だったんですね。それが合併で長岡市になった。あと、隣の三条市も木工・大工系の道具の産地として有名な所です。で、長岡市で今どれだけ職人さんがいらっしゃるのかという事で、鑿が10人。鉋が水野さんを含めて5人。鉋をやっている方が1人という事で、今は16人の方が与板町にはいらっしゃいます。元々上杉謙信の家臣が刀鍛冶を招いてから産地として発展したとか？

水 野 はい、そういう事ですね。一応、お殿様の刀を作るという事で刀剣士が来て、それでもう刀の時代が終わって、大工道具の方に変わっていったという事ですね。

久津輪 水野さんご自身は何代目になるんですか？

水 野 一応四代目なんですけど、変な四代目。

久津輪 変な四代目？

水 野 うん、戦争があって兄貴が亡くなった時に、もう辞めていたお祖父ちゃんがもう一度って。で、お祖父ちゃんが辞めた後、今度俺の父親が三代目として入って、で、俺が四代目だから。代はいっぱいなんですけど、ほんの短い間に。

久津輪 なるほど、分かりました。で、今現在は鉋



新潟県長岡市与板町の鍛冶 水野清介さん（左）
兵庫県三木市の鍛冶 千代鶴貞秀さん（右）





2019年 越後打刃物職人祭 & ミニ削ろう会



2019年 越後打刃物職人祭 & ミニ削ろう会



船津祐司さん (73) 鉋・鉋



小森秀樹さん (73) 鉋
正樹さん (67) 鉋



と鑿と鉋と、あと鉾が伝統的工芸品として経済産業省の認定を受けているという事ですね。ただ、鉾の鍛冶屋さんが去年の春に亡くなられたんですね。

水野 はい。

久津輪 だから今、鉋を作っていらっしゃる方が代わりに作り始められるようになったと伺っています。で、私達が調査をするにあたって、短時間でまとまった数の方にお話を伺わなくてはならないので、こういう職人祭、刃物祭みたいな所へ行って、朝から夕方までずっと職人さんにお話を聞くというやり方で調査を続けてきたんですね。ですから千代鶴さんも会場で立ち話でお話を聞いたのが最初でしたし、水野さんも削ろう会で最初にお会いしたんですね。この写真は6月、与板町でも越後打刃物職人祭というのと、全国削ろう会に倣う形でミニ削ろう会というのをやっています。これが、この回で9回目だったんですね。

水野 はい。次が10回目。今年の6月の第2の土日で日は決まっています。

久津輪 日は決まっているんですね。で、こういう大鉋の削りの実演とかもやっていらっしゃいました。賑やかそうに見えるんですけど、実は私達が調査に伺った時は本当に暗い話しか聞こえてこなくて。

この方は、鑿、鉋を作っていらっしゃる船津祐司さんで、屋号は舟弘さんです。舟弘さんがこの職人祭の実行委員長でした。舟弘さんも73歳なので、「もう弟子は取らない」と仰っていて。それから、小森さん、左側が秀樹さんで、右が正樹さんですね。あと秀樹さんの奥様も一緒に3人でやっていらっしゃる鍛冶屋さんなんですけど、こういう小鉋とか特殊な鉋の刃は、ほとんどこの人が作ってると言っても良い状況ですね。ですけど、この秀樹さんの方が去年の春ですか、脳梗塞にかかって倒れられたんですね。ですから一部の木工とか大工の人達の間では、小鉋がもうひょっと



したら手に入らなくなるかもしれないという話が随分聞こえてきたりしました。で、こちらもお弟子さんはいらっしやらないという事ですね。

与板町というのは昔から聞く大工道具の産地なのに、若い人が本当にいないんです。唯一と言っていいのが、地域おこし協力隊で神奈川県から入って来られた30代の方で、今3年目になろうとしてるんですね。だから、この人を除けばほとんど60歳代というような状況で、先ほどの打刃物職人祭の夜の打ち上げの時も、「ひょっとしたら来年はもうやれないかもしれない」とか、「再来年は無理」とか。そういう話も出ていましたね。

水 野 はい、そうですね。やっぱりね、若い人がいないって事はもう、元気がないって事がまず第一ですよ。例えば削ろう会をやったにしても、与板の鍛冶屋だけでは成り立たないんですよ、もう。それで、一応大工さん、あるいは鉋が好きな人っていうので、越後与板木遊会っていう会がありまして、その人達頼みで刃物祭が今できているって状態ですね。

久津輪 それは鍛冶屋さんとかとお仕事とか趣味で道具を使う、まあ、サークルみたいな。その人達が手助けしているという事ですね。

水 野 だから、その人達が「もう辞めた」って言うと、できない。

久津輪 水野さんご自身も今まではお弟子さんとか、スタッフというか従業員さんとかを、今まで雇うおつもりは全く無かったと。

水 野 ええ、もう若い頃は忙しくて、そんな人を頼んでどうこうする判断もできなかったし、で、ある程度歳をとったらこう、教えても果たしてその子が一人前に立てるのかっていうのがあって、「まあ、無理かな」という話で、今回の話が出てくるまではもう全然考えは無かったですね。

久津輪 そういう事で、私も6月ぐらいに水野さんに伺った時は、明るい話は全く無くて。「ええ、無理だ」みたいなお話だったんですけど、それが突然というか、11月ぐらいですかね、これがインターネットに上がって、あとSNSで拡散されてきたんです。「500年の伝統をもつ「越後与板打刃物」の技術を後世に残したい！～後継者を発掘・育成し、継承～」という事で、これふるさと納税を活用したクラウドファンディングですね。ガバメントクラウドファンディングと呼ばれますけれども、その制度でお金を集めるというのを始められた。

水 野 はい。

久津輪 で、その受け入れ役が水野さん。

水 野 はい、そういう事です。

久津輪 ですね。1人目。

水 野 はい。

久津輪 また、どうしてそう受け入れる事にしたのかという。

水 野 きっかけはですね、長岡クラフトフェアというイベントがあって、私、その中の人達と結構仲が良くて、その人達が与板（の後継者問題）をなんとかしたいという話から始まって、どうにかならないかって話を持ってきたんですけども、もう全然やる気がなかったんですよ。実際やろうとすると、まずお弟子さんの給料、自分の仕事、考えるととてもやれるような状態じゃない。今、自分1人で食えていますけれども、弟子が入ってきたら仕事を半分に分けてまで食えるかどうか分からない。で、じゃあ、俺が辞めた後には、今度与板に鍛冶屋さんがほとんど残らなくなっている状態ですよ。そしたら今度、道具を作る道具が入ってこなくなる。例えば、削るにしても、今センで削っているような人はもうほとんどないじゃないですか。グラインダーとか砥石とかはもう外の人頼みになって。今、与板は十何人もいるからそういう人が回ってきて置いていってくれるけども、まずそういうのから心配になるって事で、弟子の話は全然考えもしないっていう。

久津輪 なるほど。

水 野 だったんですけども、クラフトフェアの人は「どうしても残したいから頑張れ」ということで、事務方は全部その人達がやってくれるということで、一応（越後与板打刃物）組合にも話をして「受けませんか？」って話をしたんですけど、結局誰の手も上がらず、「なら、連れてきたお前がやれば良い」という事で、やるようになったということです。

久津輪 なるほど。ちょっと私の方からも補足させていただくと、長岡市には結構有名なクラフトフェアがあって、水野さんはそこで削り体験で出店されていたんですね。それで、主催者の方と仲良くされていたという。そのクラフトフェアの主催者の方達は別に「ソラヒト日和」という地域活性化のNPOもやっていらっしやって、後継者のいない色々な地場産業の後継者を見つけるプロジェクトをやっているという事で、一番最初はやっぱり与板の打刃物じゃないかと。で、前からクラフトフェアに出ていただいていた水野さんに声をかけたといういきさつなんだそうです。それでお話をお聞きしていると、一番の課題が、後継者育成の事業は教わる人に補助が出るパターンは多いけれども、教える人に補助が出るパターンが割と少なくて。



水 野 そうそう。

久津輪 という事で、水野さんは自分の手を止めて教える作業をしている間、収入が全く無くなってしまうのをどう補填できるかという所で、今までは受けてこられなかったということ。

水 野 はい、はい。

久津輪 実は国の方の、先ほど土佐の鍛冶屋創生塾で活用されていた伝統的工芸品の補助金では、教える側にもお金が出る。実際土佐では出ているので、それをNPOの人達が活用して、後継者育成をやったらどうかと。ただ課題があって、伝統的工芸品、国の補助金では設備は建てられないよという話だったんですね。

水 野 はい。

久津輪 水野さんがお弟子さんを受け入れるにあたって、例えば休憩スペースが少なくとも必要だろう、家でやっているの。とか、あとは鉋を自分で作ったらそれを実際に削ってみてその完成具合を確かめるようなスペースも必要だと。それを作るためのお金が国の補助金では出ないので、そこの部分を県のふるさと納税の仕組みを使って、お金を集めたらいいんじゃないですか、ということで取り組まれた、ということですよ。

水 野 はい。

久津輪 これ、11月ぐらいから始めたと思うんですけど、1月の末ぐらいまでが期限だったのが、あっという間に100万円突破して、12月の末でもう終わっちゃったんですね。で、締め切りになってしまいました。これ、反応を見てどうでしたか？

水 野 いや、もう集まるだなんて思ってたんですけど。皆さん、そんな鍛冶屋に興味があったとしても、お金を出してまで応援するようなもんじゃないのかななんて勝手に思っていたのが、一応削ろう会の力も借りまして、ネットに上げさせてもらったりして、

そしたら「なんか集まりが早いよ」とかいう話になって。でも、年賀状に一応皆にお願いをしようという事で、なんだ、あのぐじゃぐじゃぐじゃってしたマーク、あれ何て言うんでしたかね？

久津輪 ああ、QRコード！

水 野 年賀状にプリントして出してたら（年賀状が届く前に）「いっぱいになったよ」って言われて、それでもう、今回ここに来た人で出してもらった人もいると思うんですけども。で、出そうかなあって思っていた人もいっぱいいて。

久津輪 これからね。

水 野 だから、その人に今日謝りに、ここでせねばなあって思っています。

久津輪 ちなみにこのクラウドファンディング、お金を寄付した方いらっしゃいますか？ この中に。お、後ろにいらっしゃいます、お二人。僕もしました、はい。でも、ね、これだけの期待を受けると、責任感じちゃいますね。

水 野 そうですね。やんなきゃ良かったかなあと思ったり。

久津輪 （笑）計画としては、5年計画。

水 野 正直、今年70ですんで、もう5年もつかもたないか。自分自身がですよ。だから5年の内にいっちょめー（一人前）にしないと、その人が旅立ってねえのかなと思って。普通鍛冶屋なんて10年経ってもいっちょめーにはならないんだけど、つきっきりでやったら5年でなんとかなるんじゃないかって。で、国の補助を受けようかって話になったんですけど。

久津輪 これから、募集、公募される訳ですよ？

まさに土佐のように選考をして、という感じですかね。

水 野 はい。

久津輪 ガッツのある人を。

水 野 そう。一応国の予算を使うので、まだ出発をしてないんですよ。

久津輪 ああ、そうか。これから申請を。

水 野 4月に予算がついて初めて出発できるという。

久津輪 もしそれが決まれば、5年はつきっきりでやるつもりでいらっしゃる。

水 野 そういう条件なんで。もう、クラフトフェアの人にもそう言われてるんで。まあね、家が与板にあるんで逃げても余裕は無いんで、頑張るしかないかなと。

久津輪 多分、全国の木工家、大工の人が注目していると思いますので。ぜひ、頑張っていただきたいと思っています。ありがとうございます。

7. 木工・大工の道具を作る ～兵庫県・播州三木打刃物

久津輪 では続きまして、今度はもう1つの鉋、鑿の産地の兵庫県の三木の千代鶴さんとちょっとお話をしていきたいと思います。三木は「播州三木打刃物」ですね。

千代鶴 はい、そうです。

久津輪 で、鋸と鑿と鉋とこて鑊、左官屋さんが使うやつですね、鑊。それと小刀が伝統的工芸品に指定されているということです。これも（三木工業協同）組合の方に確認して、最新の数字を教えてくださいたんですけども、それぞれこのように部会がありまして、鋸部会で25、鑿で15、鉋で4、小刀で9、鑊部会で21と。で、その他に鉋台屋さんが2軒、鑿とか鋸の柄が10軒。ただ、右の方に「（鍛冶屋）」と書いてあるのは、三木にはすごく工業的に作っているメーカーもあるので、「いわゆる鍛冶屋的なお仕事をしているという所は何軒ですか」とお聞きしたら、大体これくらいの数かなという風に仰っていただきました。大体間違っていないですかね？

千代鶴 はい、そうですね。あとは、組合に所属していない鍛冶屋さんもいらっしゃるの、もう少し増えるかなと。

久津輪 ああ、そうですね。この時も、刃物祭みたいな所に行ってまとめてお話を聞いて来たんですけども、お会いして来た方をざっとご紹介すると、魚住さんですね。ここは常三郎っていう会社ですね。常三郎っていう銘柄で出されています。ここは、職人さん何人かいらっしゃいますよね。若い人が2人くらいかな？

千代鶴 そうですね、若い人が今は…。そうですね、2人。

久津輪 海外にも出されているというお話を聞きました。あと、内橋圭介さん。内橋さんは正確には三木市ではなく西脇市ですが。

千代鶴 組合の中に入っています。

久津輪 千代鶴さんと同世代。

千代鶴 そうですね。

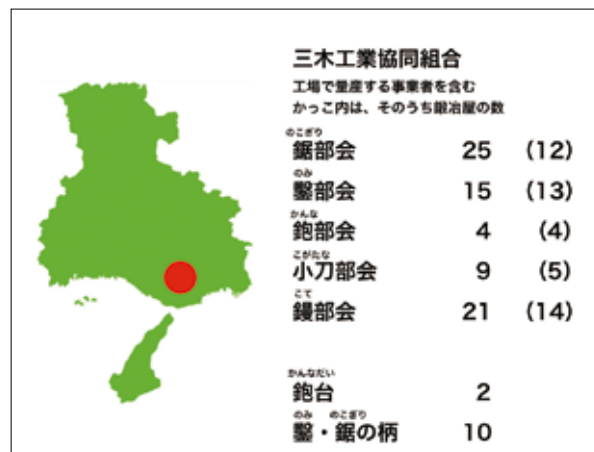
久津輪 ですね。山本芳博さんと健介さん。こちら、親子でやってらっしゃって、健介さんもやっぱり同世代。

千代鶴 一緒ですね。

久津輪 あと、大内さん。鑿の鍛冶屋さん。

それで、高橋資さん。高昇鑿という屋号で。

あと、こういう量産で鑿とか彫刻刀とかを作って





山本芳博さん（72） 健介さん（41） 鉋



堀場敏宣さん（70） 鉋台



大内俊明さん（52） 鑿



高橋資さん（70） 鑿



長池康彰さん（36） 鑿・彫刻刀

らっしゃるメーカーさんもあって、こちらの長池康彰さんは社長さんの息子さんですかね、お話を伺ったのは。あと、鉋の台屋さんの堀場敏宣さんにもお話を伺ってきました。

で、千代鶴さんなんですけど、これもウェブサイトからお借りした動画があるので、ちょっとまずそれを見ていただいて、それからお話を伺っていいと思います。

（動画上映）

久津輪 はい、という事で、これはウェブサイトに上がっている動画をちょっとお借りしてご覧いただきました。まず、千代鶴さんの、ご自身の修行体験からお伺いしていきたいんですけど、実は元々ご出身がすぐこの近くという。

千代鶴 はい、すぐそこです。

久津輪 武儀郡武儀町で良かったですか？

千代鶴 はい、そうですね。

久津輪 現在の関市ですから、本当にお隣ですね。で、ご実家も別に鍛冶屋さんではなかったんですね。

千代鶴 もう普通に公務員です。

久津輪 公務員。

千代鶴 で、家が自営業で、駄菓子屋さんとかやりました。

久津輪 ああ、そうなんですか、駄菓子屋さん？

千代鶴 まあ、コンビニの昔版みたいな。タバコ売ったり、電球売ったりと。

久津輪 で、東京の大学で彫刻をやられていた。

千代鶴 はい。

久津輪 そもそもなぜ、彫刻に進まれたんですか？

千代鶴 ずっと物作りが好きだったので。父親もそうですし、お祖父さん、お祖母さんも。で、先祖を辿っ



千代鶴貞秀の Web サイトより
www.chiyozurusadahide.jp/



ていくと大工さんだったんですけど、まあ何かしら手で触って作ってるのが好きな一家だったみたいで、何か作りたいなというのがずっとあったんです。

久津輪 で、彫刻をおやりになっているうちに鍛冶屋さんの方に興味が動いたという事ですか？

千代鶴 正確には、中学校の卒業の時と高校の卒業の時に「大工になりたい」ってずっと親に言っていたんです。で、隣近所が製材所とか大工さんとかがいたので、その影響も強かったと思うんですけど。「ま、一回考えろ」と。高校の時も「もう一回行ってから考えたらどうない？」って言われて、でもやりたいのは大工なのに、経済学部とか法学部とか、まあ勉強もできないんですけど、そういう方向に進む理由も全くなかったの。じゃあ、作る仕事、作る事に関係する仕事で何かやりたいなというので美術を選んで。これだったら、なんか先どうにかなるかな、と思いながら、そっち方面で。で、やっぱり手応えで物を作りたいかったんで、デザインとかじゃなくて、彫刻、立体造形をやりたいというので進みました。

久津輪 で、そこから鍛冶屋にはどのように？

千代鶴 ええ、彫刻ではまず食べていけないということは分かっていたので、それで職業にしようとは思っていませんでしたけど、石を彫ったり、木を彫ったり、粘土で塑像したりとかをしながら、木で彫る時は鑿を使ったり、鋸を使ったり、そういう手入れで目立てをしたりとかを全部やってきたりして。で、それに関係する金属工芸の科が横にあったんですよ。彫刻の先生とは馬が合わなくてずっと喧嘩ばかりだったので、金属工芸の方に逃げて、ずっと先生とお酒飲んでやってたんですけど。で、そこに千代鶴貞秀とか千代鶴秀とかの本があって、「あ、こんなすごい人達もいるんだなあ」って。鍛冶屋さん、まあ自分で鑿とかも新潟で買ったりとかしていたので、まだこういう人はおそらくいるんだろうけど、こういうすごい世界が

あるんだなあと知って。で、物を作るなら、なんていうのかな、自己満足で終わるより人の評価を得られる仕事の方が、いいんじゃないかと思って、それで鍛冶屋の世界というか、その方に行けたら良いなというつもりで。

久津輪 千代鶴といえば本当に、木工とか大工の仕事に関わる人にとっては最も有名な鉋の鍛冶屋さんと言っても良いと思うんですけど、どのように門を叩いたんですか、最初？

千代鶴 最初は本で読んだので、既に死んだ人だと思っていたんです。あの、この世にはいない世界で、本だけのおとぎ話で、「この地方にかつていました」というぐらいのイメージでいたんですね。本当に漠然と、なれたら良いなっていう気持ちだけだったんで、何かしら鍛冶屋じゃなくて物作りの世界にどこか行ければ、最終的には良かったのかもしれないんですけど。お金を貯めて産地をうろうろして、たまたま新潟の与板に着いた時に、「三木で鍛冶屋さんがいて千代鶴さんっていう有名な人もいるから会いに行ったら？」という感じに言われて、「あ、本当にあるんや」と思って。それで行こうと思って行ったら、まあすぐ会える訳ではなかったので、いきなり他人の家に「こんにちは、見せてください」とはちょっと失礼かなと思って、行く先々で電話でアポ取ってから全部行っていたんですけど。三木には月1回古式鍛錬というのがあって、その職人さんたちが集まって昔のやり方で鋸なり鉋なり実際に作るのを毎月やっていたんです。それを見て、どこか職人さんと仲良くなってちょっと家に行ければなあという感じで行っていた中で、組合の方にたまたま寄ってみて、「こうこうなんです」って気持ちだけをとりあえず言ったら、工芸士会というところで議題に上げてみますと言ってくださって。それからちょっとしてから、「会いたい、話を聞きたい人がいる」ということで、それで一番最初に会ったのが今の二代

目です。

久津輪 当時の千代鶴さんと言うと、正に今の水野さんの立場というか、お一人でやってらっしゃって、後継者がなかったのを弟子として受け入れることにされた？

千代鶴 いや、弟子は何人が受け入れていたことはあったんですけど、なかなか上手いかなかった時期で、で、ちょうどいい時期に私が話を聞くことになったんです。本当にたまたま、ですね。

久津輪 たまたま（笑）

千代鶴 はい。たまたま空いていて。弟子入り、いろんな所でできるけど、千代鶴って名前をもう知ってたんで、ここで考えようとかではなくて、とりあえず入るという選択をしなかったらあと他にどこ行けば良いんだという気持ちがあって。で、チャンスがあるなら今もう動こうって、「できますか？」と話をその日に切り出しました。

久津輪 もうその日に？

千代鶴 はい。

久津輪 実際にお弟子さんとしての教わり方というのは、今土佐でやってらっしゃる方達とか、これからやられる水野さんの参考にもなると思うんですけど、実際に二代目の千代鶴さんの教え方というのは一体どういうやり方でしたか？

千代鶴 最初の3ヶ月は「見ろ」と言われて、ひたすら見ました。もう本当にこれぐらいの距離、鼻息がかかるぐらいの所で、「うるさい」と言われるぐらいの所まで寄って。それで3ヶ月間ずっと見てからやっと「研磨仕事をしろ」って。で、研磨仕事をひたすら何年かずっとやって、そのうち、「火使う練習をしとけよ」と言われて、火を使う練習、火は製品に仕上げるまで3回は使うんですけど、その中間作業の火を使う練習をして。で、そこからとんとんと、焼き入れと鍛造、最後と最初を覚えていく感じで。で、大体覚えきったら10年ぐらいはあつという間に過ぎました。

久津輪 覚えきるのに10年ぐらい？

千代鶴 「これやる意味ってなんやろ？」とかが分からないままずっといくので大体3年ぐらいあつという間に過ぎて。で、「こうしないと、こうならない」って前後が繋がってくるのに3年目以降、で、5年ぐらい経ってきたらやっと何かこう、自分でコントロールが効くようになってきて。本当は高知（の鍛冶屋創生塾）みたいに2ヶ月ぐらいぶっ通しでやれば覚えられるかもしれないんですけど、その時その時の作業の中でずっとついていたので、任されるというか根を詰

めてぐっと凝縮してできる時期ではなかったっていうのもあって、それぐらいの時間は経ってしまったんですけど。結局、そんな感じで10年ぐらいで一通りやりました。

久津輪 もうその間、基本的にこう言葉で補足するかそういう感じではなく、「見て盗め」というような感じなんですか？

千代鶴 「この形にしろ」って言われるんです（笑）。そのプロセスは所々で叩く回数とか音が違うとか、この姿勢じゃないとかというのは言われるんですけど。「こうやで」という感じではなく、ここは見せて覚えろ、見て覚えろ、という感じで。

久津輪 そういう教育のスタイルというのは、苦痛に感じたりすることはなかったですか？

千代鶴 私がたまたま、その師匠のやり方にタイプとして合っていたのかなっていう気はあります。美術やる時でも模写とか同じ絵を真似して描くとかあるんですけど、そういう作業と全く一緒に、真似するためにはどういう筆使いをしないとこのタッチが引けないとか、どのぐらいの勢いでやらないとこれが出ないとか、そんなこと考えるんですけど、それとほぼ一緒でした。なので、音聞いて、この音が出れば正解、叩く回数も一応こう数えて、この回数でこの面積を叩けば良いんだなというのは、その都度見て覚えるとか音で聞いて覚えるとか、仕上がりの形でどの部分が当たっているのかとかは、そういった細かい修正をしていく感じで覚えていきました。

久津輪 その一通り学ぶのに10年というのは、振り返ってご自分としてはどう思いますか？ やっぱり、長いなと思うか、それとも、当然これぐらいかかるなと思うか。

千代鶴 正直ちょっと長かったかなという気もするんですけど。製品を作るのは、まあそんなに時間をかけなくてもできると思うんですけど、そこにくつついてくるいろんな精神的なものとか、どういう物を作りたいかとか、いろんなことを考えるとそれぐらいは必要なのかな、とも思ったりします。ただ、私はあんまりその辺、なんていうのかな、センスがない方で時間がかかっただけで、おそらく他の人がすれば早くなっていたかもしれないですね。

久津輪 お師匠さんが教えたこと以外にも教えて色々試してみたとか仰っていましたよね？

千代鶴 ああ、そうですね。

久津輪 それは何故ですか。

千代鶴 「これはするな」とかは良く言われていたんですけど、自分なりにしないようにとずっと考えて

やっていた時期もあったんですが、やらずにこのままずっといったら、例えば師匠が死んだ時に、次に自分が繋げる、繋げていこうと思ったら、なんでダメだったのかを考えないと、師匠から100のことの要素として30を教えてもらったら、その30が自分にとっての100になってしまうんで。それが次の世代に教えた時に、30の内の5になってしまったら次の子は一体何を基準に・・・今まで私達が泥の選定とか材料の良し悪しとかを決めていた基準が分からなくなってしまうというのが怖くて。ダメって言われることを、とりあえずこっさり全部一通り失敗して。で、こっさりを見せない様に、全部隠して（笑）、やってました。

久津輪 お師匠さんが帰った後とか、お休みの日とか。

千代鶴 そうですね。あ、休みの日はするとバレルんで（笑）。「この仕事やっつけよ」と言われる時に、まあ、これはあまり言わない方が良いでしょうけど、できる仕事をゆっくりしている時間が、ぎゅっと凝縮して早くできる仕事があればぎゅっとやってしまっ、空いた時間にすかさずやるっていう（笑）。なかなかそこまで技術的にね、手が動かないのでほんのちょっとしか時間は空かないんですけど、その間にいかにやるか。で、原状回復しておいて師匠に分らない様にして、という。

久津輪 やっぱり一対一の関係だから、気兼ねしてバレル様に気を遣いながらという。

千代鶴 うーん、まあ、バレた時もあるんですけど。背後に立ってたっていう恐ろしい事があったんですけど（笑）。そうです、なるべく仕事をした上で、仕事して空いた時間。だから、仕事する前に好きなことするんじゃなくて、課せられた仕事をまず果たし切ってから、次の仕事までこれだけ空いてるっていう時間を作っちゃんと「この時間ならいいでしょ」と言える時間を作ってから、それをやるという。

久津輪 ちなみにその10年間の修行期間中は収入的にはどうされていたんですか？ ちゃんとお給料が支払われていたという感じ？

千代鶴 一応お給料はいただいていた。まあ、でも一般の方がいただく給料では全くなく、最初3万とか。まあ、私はそれで納得してたんですけど。仕事できないのにお金もらってもしようがないので。僕の方が足引っ張っている方になるんで、それはいただけないなと思って。で、住み込みで電気代とかも全部払ってもらっていて、家とか住む場所もいただいた上での、完全な食費だけ。で、ご飯もよく呼んでもらって食べてたりしたんで。

久津輪 じゃあ、もう完全な内弟子という。

千代鶴 内弟子で。

久津輪 伝統的なやり方ですね。水野さん、参考になるか分かりませんが（笑）。

千代鶴 このやり方、しない方が（笑）良いのかもしれない。たまたま私は「そういうもんだ」と思って、はい、やっていたので。

久津輪 貞秀を襲名されたのは去年の…。

千代鶴 2月。

久津輪 2月ですね。それはもう、修行期間が明けたことを表明されたという。

千代鶴 そうですね。次の世代に繋ぐための技術は持ってますよということを認めてもらった。

久津輪 そうやって鉋づくりのお仕事をされていらっしゃる傍で、ちょっと毛色の変った活動もされているそうなので、それもお覧いただこうと思います。これです、これは一体なんですか？

千代鶴 私が個人的に日本酒が好きで、よく飲んでるんですけど、日本酒を飲む時に器を作る工芸品の産地がすごくたくさんあるので、そこで知り合ってた若い方とか、「この人に作ってもらいたいなあ」と



いう方に次々お願いをして、「好きなのを作ってください」と言って作ってもらったぐい呑を置く棚です。この棚も江戸指物に、秩父銘仙っていう埼玉の背後に丸い水玉模様のある布なんですけど、銘仙の布を張り、取り替えできるんです。金具を福岡県の八女福島の仏壇の金具職人さんに作ってもらい、真ん中の、左から2番目の所にちょっと分厚いのが入っているんですけど、そこへ東京の手描き友禅の作家さんのデザインしたものを入れ、取り出しできる様な形で屏風を作ってもらって、屏風の仕立てを、これも東京の江戸表具の職人さんに。まあ皆で、私が声をかけて「こういうデザインで作りたいんです」というので、お願いして作ってもらいました。

久津輪 それをなぜ刃物鍛冶である千代鶴さんが中心的な役割を果たしてお作りになったのかという。

千代鶴 まず、伝統的工芸品の産地が今230品目以上あるんですけど、その中で他の工芸品はその物単体でこうお客さんと触れ合う、ユーザーさんと触れ合うというものなんですけど、この打刃物系の道具に関してはそれを加工する職人さんがユーザーで、私達の姿はほとんど一般には見えない立場で。どちらかという裏方という様なイメージであまり光が当たらない所なんです。私達の打刃物産地がこれから先を考えていった時に、他の産地で刃物を使うっていう職業がほとんどだったんです。で、その人達が表に立つていくことで自分の方に光が当たってくれるというか。なんていうのかな、先憂後楽というか、最初に私達じゃなくてユーザーさん、というか、木工関係とかそういう人達が活躍してくれることで自分の方に光が当たって欲しいなという、そんな思いで始めたというプロジェクトだったんですけど。

久津輪 新しい世代の鍛冶屋さんとして新しい需要づくりというか、新しい方向性を模索する1つの試みみたいな。

千代鶴 そうですね。このコラボレーションするプロジェクト自体が、本当は一人で二人、一人の産地プロデューサーさんとかが二人の職人さんを合わせてするっていうことしかできなかったんですけど、もうちょっとこういう光の当て方もあるんじゃないかと思って、5人ぐらいでやって。職人さんの気持ちを汲んでできるんじゃないかと思ったんです。本当はこの指物の仕立てにうちの鉋を使ってもらうつもりだったんですけど、そこまで間に合わず。それを含めて、刃物職人がプロデュースするということをちょっと知ってもらいたかったというか。木工でやる、私がプロデュースすることによって、こういう世界に光が当



千代鶴貞秀さん（中央）

たって欲しいというメッセージも込めていたというのがあります。

久津輪 やっぱり大学で美術とか彫刻をやられていたという経歴もある千代鶴さんならではの、すごくユニークな活動かなと思いましたけど。プロデューサー的にも動ける。

千代鶴 例えばその、刃物産地とかさっきの欲しいものを、江崎さんみたいにお互いの交流する場が無いとか、「これが無いんだけど、どうしたら良い？」っていうのがあった時に、問屋さんとか業者さんが動いてもらうという状況がとても要んですけど、なかなかそれがこう、世代交代もあって、「こういう物が欲しい」という伝言ゲームになっていくと最終的に辿り着いたら違うものが出てきたという、そういうパターンがどうしても生まれちゃうんですよね。それを誰かが取り次がないといけないっていう時に、まあ、自分で動くのは一番ダメージが大きいというか、動いてしまったら作れないんで。

久津輪 そうですね。

千代鶴 そこが一番苦しいところなんですけど。でも、例えばそこで動けば、「じゃあ、なんであいつが動かなきゃいけないんだ」って思ってくれる人がいるかもしれない、とか、そういう可能性にかけているっていうのはあります。

久津輪 これをきっかけに新たにまた、人の集まりができて、っていう機会もある。

千代鶴 そうですね。

久津輪 これはどう？

千代鶴 これは、鰻の蒲焼きに見える鰻焼き包丁なんですけど。これは遊びというか、あれですね、打刃物って、さっき言った裏方的なことだけではなくて、少し表に立てるようなこともやっておきたいということ。その中で実際これが蒲焼きだと思って目を引く…

目を引いてくれなかったんですけど。これが刃物だと気付く前に通り過ぎる人の方が多くて。

久津輪 (笑)

千代鶴 「なんで蒲焼きがこんな所にあるんや？」っていう。

久津輪 遠目で見るとなかなか刃物には見えないっていう。

千代鶴 箸まで置くと、なんか蒲焼きにしか見えなくなってる。

久津輪 (笑)

千代鶴 これも、このお皿は愛知県の赤津焼という焼き物の人との共同製作ということで一緒にやったんですけど。工芸品であるんだったら自分が美術作家的要素があっても良いんじゃないかっていう気持ちでやっていることです。

久津輪 千代鶴さんはまだ襲名されたばかりですけど、三木の産地全体として後継者を育てたり、技術を繋いでいくという点ではどのような感じですか？

千代鶴 産地としてですか？

久津輪 三木全体では具体的に何か取り組みは、そこまでは無いんでしょうか？

千代鶴 欲しいとは思っていますし、手仕事でやっている鍛冶屋さんが(後継者を)欲しがっている状況は、今一息ついてしまっている様な。息子さんが事業を引き継いでやっている。で、年配の方はもう引退するから取ろうとは思っていない。もう80歳とかになってしまっている。という、一旦ひと段落ついてしまった印象があります。

久津輪 なるほど。

千代鶴 で、人数が多い所とかはやっぱり作り手が欲しいので、そういう所が募集をしているような感じがすね。もうあと10年ぐらいするとまた次の世代を欲しがると時期が来ると思うんですけど。これからその10年の間で無くなる所がすごく増える感じです。



8. これからの木工・大工に手道具は？

久津輪 じゃあ、ここまでの話を踏まえて、川上さんから作る側の方に何か。

川 上 本当に僕、さっきも言いましたが、自分の思ったものが作れなかったとか、欲しい刃物を作りたいんだけど、どうしたら良いか分からない。今も仰っていましたけど、もう少し使い手と作り手の方が直に繋がってみたい、問屋さんとのコミュニケーションが上手くいくようなものを今後もっと作っていききたいなと思いますし、まだまだ僕としては頑張ってもらいたい気持ちがいっぱいですね。

久津輪 水野さん、何か…。今日、木工家の方達もたくさんいらっしゃっていて、水野さんの鉋を使っておられる方もいらっしゃるんですけど。大工さんもいらっしゃいます。使い手の方達に何か聞きたい、もしくは仰りたいことがあれば。

水 野 使いやすいつていうのが作りやすいつてことじゃ無いんですよ。結局それも、皆さん仰ったように直接聞かないと分からない。ということで、さっき削ろう会の話が出ましたが、そこへ行くと本当に大工さん、あと素人の好きな人がたくさんいるので、直接言ってもらえる。ということで、大人にさせてもらったし、まあ大人つていうのもあれだけど、勉強もいっぱいさせてもらった場所なので、もっともっと削ろう会みたいな会がそこら中にできればなあ、とは思ってますけどね。そして、呼んでもらえたら遊びに行こうかなあとは思ってますね。

久津輪 やっぱ水野さんご自身にとっても削ろう会の間というのすごく大きかったんですね。

水 野 ええ、もう本当に削ろう会がなかったら、鉋鍛冶ではもういなかったと思います。

久津輪 いなかった？

水 野 はい。

久津輪 辞めていた？

水 野 はい。

久津輪 千代鶴さんも何か最後全体にありますか？

千代鶴 手仕事で作っている鍛冶屋さんはおそらく、前向きな所は本当にお客さんの声を聞いて、そこに合わせていきたいと思っている人がまだまだいますけど、そういう所へ来てくださって、「こうしたい」と言ってくだされば。まあ、うちだけかもしれないですけど、通常作っているのは定番の形で、「ここ、

こうしたい」という気持ちは、形があれば、やっぱりそこに応えてあげるのが、こういう1個1個作っている仕事ならではのと思うので。そういう所をあまり遠慮せずに、言ってきてもらえたらなあと思います。

質疑応答

久津輪 はい、ありがとうございます。大分時間も迫ってきたんですけども、会場の皆さんからお三方に何か質問はいかがでしょうか？

会場から 僕も木を扱う仕事をしているんですけど、川上さんにお伺いしたいんですが、お客さんに木の良さを説明する、そうなる様に繋げるということだったんですけど、どんな説明というか、どんな言葉で上手く届いた、という経験とか…。

川 上 それをまさしく、僕も探している状態ですね。

会場から 現在も？

川 上 現在進行形なんです。本当に、これ聞きたいぐらいで、今回集まった皆さんもこういうものに興味があって見に来てみえると思うんですけど、じゃあ実際僕が、千代鶴さんが、家を建てる時にこういう道具を使って、江崎さんが倒したような木を使って家を実際に建ててみたいかなつていうのも聞いてみたいですし、どういう届け方をした時にどういう反応をしてもらえるかっていうのを、今まさしく悩んで。いろんな言い方をしたり、いろんな伝え方を考えている途中なのでなんとも、すみません、答えが出ない所なんですけど。

会場から 自己ベストだと？

川 上 自己ベストですか？ 自己ベストはですね、槍鉋を使って、住宅の階段なんですけども、階段を全部槍鉋で仕上げさせてもらって。

会場から 踏み板を？

川 上 はい、踏み板ですね。で、これを素足で上ってもらおうと。で、足の裏でこの窪みを感じてもらいながら、槍鉋の溝が滑り止めになっていると。で、使われている材料は地松を使わせてもらったんですけど、この階段を上り下りすればするほど経年変化でこの槍鉋の窪みの跡と、木の質感ですよ、こう良い具合になっていきますよつていう説明をした時に、本当に施主さんが素足で上って行って「これは良いわ」って言ってもらった時が一番感覚が良かったですね。

久津輪 他、よろしいですか？ 私の方から何人かお聞きしてみたい方がいるんですけど、川上さんと同じ

様に調査をさせていただいた大工さんで、郡上の兼定さんがいらっしやっているので、今日のご感想とか、何か伝統技術についてのご意見とか伺えればと思うんですけど。

会場から 郡上で大工をやっています兼定と申します。私も無垢の木を使った仕事を主にやっていまして、無垢の木を加工したり、取り付けるには手道具が必ず必要ですので、手道具もよく使います。その中でも鉋というのはものすごく、私、昔から興味がありまして、削ろう会も何度も参加させていただいているんですけど。もしお伺いするとしたら、私ら大工からすると鉋ってもう切れ味、切れ味がどうなんだっていう。まあ鑿もそうなんですけど。その切れ味に一番こう影響してくるといえるのか、これは何だと思われませんか？ 技術的もあるんですけど、そう、精神的な…。どっちかというと僕は自分で仕事をする時は精神的な気持ちの方が大事なんじゃないかなんて、そういう事も思ったりするんですけど。何か、今までとか日常仕事される中でどういうことを思って刃物を打っているのかということをお伺いできれば。

水 野 俺の場合は、伝統工芸品を作るというよりも道具を作る鍛冶屋でいたいと思っていますので、とにかくこの世から消えて欲しいんですよ。いっぱい有名な人の鉋残ってますけども、そういう鉋じゃなくて、もうちびてどうにもならなくなかって、もう捨てるような鉋を作りたいとずっと。うちの親父もそう言ってたし、これからは絶対無くなる道具を作りたいと思っています。

千代鶴 使ってもらう、使っていただく上ではやっぱりここぞって時に手に取ってもらいたいなという気持ちはあります。作る時は自分の子供を育てるような感じで作って。さっきも少し言いましたけど、叩く回数とか、曲がり代とか、火に入れる時の入れ方、「この温度だったら痛がるな」とか、「ここがちょうど今居心地良さそうにしてるな」とかいうのを、色の変化とかで感じながらやっています。こういう被せ方した方が良いかとか、布団を被せるように意識した方が良いかとか、お風呂に入れる、まあアチアチなんですけど（笑）。鉄にとっての良い、ちょうど良い所っていうのを探しながら。で、待つ時とか、こうやってる時も「この子には良い」って思いながら、作ってます。

久津輪 今日、会場に鍛冶屋さんのことをずっと取材されていて、BE-PALでの連載や日本鍛冶紀行などの著書もある、かくまつとむさんがいらっしやってるんで、かくまさん、是非ちょっとお話を、ご意見ご感想、質問でも結構です。

会場から かくまつとむと申します。半分取材で、半分興味、個人的な興味で伺っているんです。すごく置かれている現状はですね、私が15年ぐらい前から後継者がいない鍛冶屋さんばかり取材してきたものですから、近年世代交代ができた所は残る、ずっと残り勝ちだと言ってきたんですけど、そういう傾向があったり。あと、いろんな社会の情報の流れが変わってきて、あと制度ですよ、支援制度があって、若い職人、鍛冶職人が増えてきてるなという印象があって。今日それを正に実感できた所です。これは逆に久津輪さんへの質問なんですけど、あるいは会場の皆さんへの質問でもあるんですが、今日浮かび上がった課題としてはコミュニケーションの場がもっと必要だと。作り手、使い手、あとはもうちょっとしたら第三者ともコミットしてくる環境が必要なのかな、と思って。第三者。つまり西山さんが仰った様に遊びで刃物が好きな人とかね、趣味で。こういう場をですね、ひょっとしたら今日がキックオフなのかもしれないし、久津輪さんは今後どういう形でですね、これを岐阜から広めていったらいいかなと思いますか？

久津輪 そうですね、私も今年この調査を始めたばかりなので、全く偉そうなことを言えないんですけど、やっぱりこの調査をしていく中で本当に1つの理想だなと思ったのは「削ろう会」の場なんです。そこでは本当に作り手と使い手が、対面で話ができて、しかも切磋琢磨ができて、技術が向上していくという。やっぱりああいう場を、あれは大工さんとか鉋に特化した所なんですけど、楽しみながらやるということをもっといろんな場でやっていければ良いのかなと思っています。で、ちょっと宣伝めいちゃうんですけど、私、グリーンウッドワークという生木の木工の活動をやっているんですね。生の木を斧などではつって、それをナイフで削って、スプーンを作ったり、お皿を作ったり、椅子を作ったりという木工の普及活動をやっている。



グリーンウッドワーク用の斧の開発

ます。海外では先に火がついて、ブームになって、今ものすごい数の人が斧とかナイフでスプーンづくりをやっているんですよ、世界中で。それを日本でも紹介しているんです。海外でそういう木工にはまっちゃった人達というのは、ものすごく質の高い斧とかナイフを欲しがるんですね。最初は普及品から始めるんですよ。工場で作られている、2～3000円のナイフ。これは私が書いた本なんですけど、表紙に写っているのはスウェーデンの大規模工場で作られた3000円ぐらいのナイフなんですけど、これで始めてはまった人はもう10,000円ぐらいの刃物を鍛冶屋さんに発注したりするんですね。

斧もそうで、人気のある鍛冶屋さんなんかはもう半年待ち、1年待ちというほどの需要があったりもすると聞いています。で、この写真の右側の斧は実は、今日パネラーとしても来ていただいた高知の西山商会さんに仲介していただいて、先程、式年遷宮の斧を作っている鍛冶屋さんですとご紹介した84歳の浜田芳彦さんに打っていただいた斧身に、私がデザインした柄をつけて、趣味の木工用として販売を始めているものなんです。

だから私は、これから手道具を生かしていく場所としては、ひとつはトップレベルの文化財や伝統建築みたいな所など、文化として国の税金を使って公的な力で残すという所ですよ。一般の住宅建築や家具製作など、産業としてはどうしてもやっぱりスピードが重視されてしまうのであまり手道具は使ってられないけども、もう一つ、趣味としてあるいは教育として、こういうものを楽しむ、それから学ぶという所で生きてくんじゃないかなと思っています。だから、そこにたくさんの人が入りやすいように、そのためには使いやすい刃物が必要だし、ここにあるような本とかビデオなどのソフトウェアも必要だし、いろんな取り組みが求められるんじゃないかな、という気がします。

もう1つ、写真を用意しているのをお見せしたいんですけど、これ、削ろう会USAの写真です。私は去年、木造船フェスティバルという、木の船ばかりが集まって、それを展示公開するイベントをシアトル郊外で毎年やっていて、そこに参加してきたのです。300隻ぐらい集まるのかな。で、その会場で削ろう会USAの方達が鉋削りの実演をしていたんですよ。ものすごくレベルが高いです。削ろう会は海外にも支部があって、アメリカでもすごく活発に活動されている。

この左側の法被を着ている人はアンドリュー・ハンター (Andrew Hunter) さんって言うんですけど、こ

の人、雑誌に記事まで書いてるんですね。これ、アメリカの一番クオリティーが高いと言われているファインウッドワーキングという雑誌なんですけど、そこに日本の鉋の仕立て方、研ぎ方、使い方の特集記事が載っていました (Get to Know Japanese Handplanes, Fine Woodworking March/April 2017)。

先程、お料理包丁などがすごい勢いで海外でも売られているという話が出ましたが、木工の世界でも同様で、日本の工芸ってすごくレベルが高い、その道具もレベルが高いということで、やっぱり相当注目を集めているんですね。産業が進んでくればくるほど、あとのづくりがグローバル化すればするほど、手仕事に目が行くし、ローカルな物に目が行くんじゃないかなと。まあ期待も込めて思っているんですけど、そういう時に日本の物ってやっぱり世界に誇れるものだと思うので、グリーンウッドワークが海外でブームになったから、それを全部輸入してきて海外の刃物で楽しむ、ではなくて、日本製の良い刃物を開発して、逆に海外に売り込むぐらいのつもりでやりたいなということを、私としては思い、活動しています。かくまさん、答えになってるでしょうか？

会場から ありがとうございます。

久津輪 ごめんなさい、あとお一方だけお聞きしたかったんですけど、水品さん、良いですか？ この調査をしていてやっぱり大切だと思ったのは、削ろう会みたいな繋ぐ場もそうなんですけど、道具を売る人、問屋さんや小売店の人がいかに作り手の方の情報をきちんと使う人に届けられるとか、使う人の情報を逆に届けられるかという所だと思ったんですね。で、その活動をまさにやっていらっしゃる、与板の刃物商の水品和春さん、ご感想ご意見をお聞かせください。

会場から これだけ、第1回目にしてこれだけの方がね、集まられるのはやっぱりすごいことだと思っています。鍛冶屋さん、鍛冶フェスですよ、うーん。い



やいや、私、言いたいのはね、道具を使って物を作
てくださる方々が、この鍛冶屋さんの世界にすごく興
味を持ってくださってるんですよ。応援してくださる。
あのクラウドファンディングがね、本当に12月の9
日にスタートして、12月の24日かな、の時点で満
額オーバーしちゃったんです。それくらい鍛冶屋の世
界を考えてくださる方がいっぱいおられるんだなっ
て、日本は良い国だなんてつくづく思いました。素晴
らしい方がいっぱい揃っておられるなって思ってね。
本当に、喜んでます。今、久津輪さんが仰ったよう
に、私は産地で刃物の商いをさせてもらってます。で
すから、鍛冶職とユーザーさんとをどれだけ短く繋げ
るかって言うね、ユーザーさんの声を鍛冶屋さんに届
ける、鍛冶屋さんの意見をユーザーさんに伝える、そ
れすごく大事だなと思って、私やっているつもりです。
もし文句があったらまた言ってください。よろしくお
願います。今日は本当にありがとうございました。

久津輪 はい、ありがとうございます。その他、皆さ
んご意見いかがでしょうか？ よろしかったですか？

では、時間になりましたので、今日の会はこれで終
わりにしたいと思います。もう一度パネラーの皆さん、
江崎さん、西山さん、進藤さんも壇上の方に上がつて

いただいて、どうぞどうぞ。パネラーの皆さんに改め
て拍手をお送りください。ありがとうございました。

(会場拍手)

久津輪 はい、ということで、今日のイベントは以上
になります。遠い所からお越しいただいてどうもあり
がとうございました。ちなみに鍛冶フェスは明日も明
後日もありまして、明日はもう定員に達していて予約
でいっぱいなんですけど、南京鉋というちょっと特殊
な鉋にこだわったマニアックなイベントで、ナンキン
フェスというのをやる予定です。南京鉋を最近作り始
めた若い作り手さんの人達と、それを使ってプロの仕
事をしている木工家の人達が講師になって、南京鉋を
使って削って楽しむというイベントをやる予定にしてい
ます。で、この調査自体はこれからも続けていく
つもりにしています。まだ始まって1年ですから、
来年度、再来年度と続けていって、またこの鍛冶フェ
スのような報告会と、ちょっとしたイベントを兼ねた
ものをやっていきたいと思っています。また今後とも
ぜひご協力をよろしくお願い致します。以上です。ど
うもありがとうございました。



鍛冶フェス・パネルディスカッションと、ナンキンフェスのショートムービーを
以下のURLからご覧いただけます。

<http://www.forest.ac.jp/academy-archives/kajifest2020>



ナンキンフェス

日時 2020年1月12日(日) 10:00～17:00、1月13日(月・祝) 9:00～15:00

会場 岐阜県立森林文化アカデミー・森の情報センター

主催 岐阜県立森林文化アカデミー・グリーンウッドワーク研究所

講演・実演

大久保公太郎(木工家、長野県松本市)

吉野崇裕(木工家、山梨県富士河口湖町)

杉田悠羽(道具製作者、岐阜県富加町)

西禎恒(道具製作者、兵庫県多可町)



鍛冶フェス ～ものづくりを支える鉄の道具～ パネルディスカッション記録

調査：

久津輪 雅（岐阜県立森林文化アカデミー准教授）

大滝 絢香（岐阜県立森林文化アカデミー クリエーター科 2 年）

運営：

加藤 慎輔（グリーンウッドワーク研究所）

近藤 宗由（岐阜県環境生活部 県民文化局 文化創造課）

青木 浩和（岐阜県環境生活部 県民文化局 文化創造課）

動画・写真撮影：

武藤 弘明（boum）

久津輪 雅

ロゴデザイン・レイアウト：

伊藤幸子

調査協力：

杉田 悠羽（道具製作者）

西 禎恒（道具製作者）

運営協力：

岡田 和美（岐阜県立森林文化アカデミー クリエーター科 1 年）

内山 翔平（木エヤマニ）

由浪 怜奈（森林たくみ塾 塾生）

動画・写真提供：

進藤 恭平

川上 舟晴

千代鶴 貞秀

© 岐阜県・岐阜県立森林文化アカデミー

本報告書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。



鍛冶フェス
the Blacksmithing Festival
ものづくりを支える鉄の道具
パネルディスカッション記録